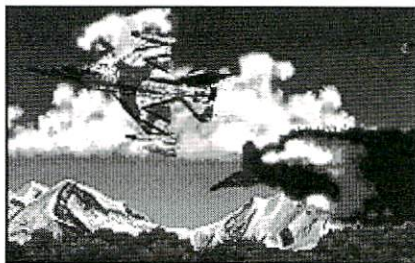
July 2011 Volume 12, Number 9
TL 12.00 Turk.
$4.50 U.S.A.
£2.50 U.K.

CONTENTS

THE ROOT OF ALL EVIL

論説

税！飛行隊はこの諸悪の根源から逃げられるか？

私は水曜日の夜、セリムにいた。いつものジャン・ポール・プリデュークスの後ろのテーブルだ。彼とのインタビューが（この記事の後）が終わったちょうどその時、私の後ろの方から酔っぱらったトルコの役人の声が聞こえてきた。彼の名は知らないし、またそれはどうでもいいことだ。大事なことはこの役人の軽い口によって、8月1日にトルコ政府が公布を予定している『思いがけない利益税』のベールが剥がされたことである。

この新しい『思いがけない利益税』は、実に総収入の28％に対して適用されることになる。課税対象には、殺人ボーナス、下賜金、月間消費額の15％以上の利益も含まれることになるだろう。

この税がトルコの第一の産業を荒廃させることになることは明白である。不平分子は同じ軍によって打たれた。不平分子が財政的に不安定な状況にある間に、金が流通するところはどこでもそれはどんどん減少していった。

彼の総計費はとても少ない。総年間収入に28％の控除を受けた総計費の利益の15％に、さらに28％の課税がされるのだ。もし彼ら傭兵飛行隊が8、時には9桁におよぶ大口の取引をしたとしても、月に1000から2500万アメリカドルは必要とされるメンテナンス費用と総経費を考えると28％の控除は最前線で働く彼らにとってあまりにも少ないものだ。

保険料の増額を考えると、この事実は更にはっきりとして来る。最新の研究によると、イスタンブールに本拠を持つ27の傭兵飛行隊のうち、外部からの補填を必要とせずにやっていける飛行隊は僅かに3つしかない。残る24社は外部の代理店からジェット機のリースを受け、万が一の時に備えて、保険に入ることを余儀なくされている。傭兵の操縦する航空機が巻き込まれる危険を考えると、その保険料は決して安いものではないだろう。

傭兵産業が成長することで事態はますます悪化している。飛行機は部隊が成長する前に破壊されてしまう。新税がなくとも飛行隊の生存は圧迫されるであろう。多くの飛行隊の支払能力は前例のない拡張を試みている。

これは傭兵に取って悪いことではない。経済的な無風状態がイスタンブールにたれこめ、数カ月の内に一律に暴力事件が増加するだろう。傭兵達は退屈と欲求、不満からジャックナイフやスピードに依存するようになり、市民に彼らの習性をアピールすることになるだろう。ストリートの混乱によって大胆になった雇用者は、支払条件には手を触れず罪の無い多くの者（そしてほぼ間違いなく攻撃の標的はその中にはいない）が死ぬ血の抗争をけしかける。新税の導入は攻撃的エネルギーの解放を悪化させるだけだ。

彼らの合言葉はこうだ。平和でないならばせめて利益を。無分別な破壊は避けられない宿命なのか。引き返せない坂道なのだろうか。

今回の記事で我々は、恐ろしい風潮に対抗するユニークな飛行隊を取り上げてみた。ジェームズ・スターン司令の率いる飛行隊「ワイルドキャッツ」だ。

彼の指揮の元、この部隊は利益と正義に基づいた使命だけを受け入れている。たとえ高い収入があっても不当な殺人は行わない。

この記事から生じた疑問。それはワイルドキャッツが一時の仇花なのか、それとも永続性のあるものなのか。彼らを取り巻く暴力と新税を考え合わせたとき、果して彼らは泳ぎきることができるのか、それとも時代の流れの中に沈むのか。

そして4年前、ワイルドキャッツから離れたジャン・ポール・プリデュークスが見いだしたもう1つの傭兵部隊『ジャッカル』。彼らの哲学は伝統的な商人を幾分越えている。プリデュークスは小切手帳の帳尻ほどには使命の重さを考えていない。しかしジャッカルの収入は、理想主義的なワイルドキャッツの三倍にも達している。

これが来るべき未来の商業哲学なのだろうか。我々はこの記事でこれらの問題を両方の側面から考えてみたい。そして、その結論を出すのは貴方である。

－GPA

読者の声

私は貴誌の最近の記事『仲介人による仲介』（編集部注：12巻、9号、2011年5月）によって仲介人に与えられた、ひどく不当な評価を正そうと思う。実際にゴミのような任務を紹介する不当な仲介人もいるし、またそれはひどいことだと思う。しかし私のような、多くの勤勉な職業斡旋人に、貴誌の下した評価は全く当てはまらない。

確かにイスタンブールの飛行隊の多くは、仲介人なしに仕事を見つけられると信じたがっている。しかしこれは非常に危険な誘惑なのだ。実際には「余分な中間人の切捨て」によって確保したわずかな利益も、彼ら自身が職さがしをする際のトラブルや危険との引き換えによって帳消しとなってしまうだろうからだ。

今や仲介人はかび臭いバーに座ってはいない。バーに座っていないとき、我々は古い町を嗅ぎ回り、汚い群衆に鼻をつまみ、不潔な路地に体を進め、新しい仕事にありつくために、賄賂を送る。あなたがたに私たちがしたようにイスタンブールの貧民街を移動しながら、仕事の最後にナイフやスミス&ウェッソンの銃口から命からがら逃げだしたことを話そうとは思わない。運の悪い時に運の悪い場所にいるあなたに、全く無関係の弾丸が頭めがけて飛んでくるかもしれない。またあるとき、仕事上のライバルから悪意を持った弾丸が送られてくるかもしれない。いずれにしてもあなたは死によって人生を終わるのだ。

みんなの希望により、そういった病んだ子犬は売られなくなる。それは狩りには向かないのだ。

ーベト

[記事の筆者 P.Fisch は以下のように答えている：たとえ多くの場合、怠惰な飛行隊が仕事を見つけるのを仲介人が助けているとしても、それは大した事ではない。熱心な企業家はどんな仲介人よりも多くの仕事をみつけている。私は記事を訂正する気はない。 ー編集部]

おまえらは本当に気に入らない。俺は7月のおまえらの雑誌の『仕事求む』の広告欄に多くの金を費やした。それから3カ月経つが応答が無い。クソったれ。おまえらの雑誌が紹介してくれる仕事で返せるだろうと思い、俺は広告のために借金をした。ところが応答はない。俺は舗道に放り出された。道端でしゃがみ込んでいたっていいことはない。俺はあちこちで汚い仕事をしながら金を貯めて格納庫にA-10を持てるようになった。ところが今、俺はそれで雨をしのいでいる。要するに俺の言いたいことは、金を返せということだ。何故なら俺はいま、本当に金がいるからだ。さもないとおまえらの編集部へ押し掛けるぞ。

ー失った者

[全ての潜在的広告主に理解して欲しい。『サドンデス』のあのページのどんな広告に対しても、必ず望み通りの結果が獲られる保証はないということです。なお、『失った者』さんは今の生活を維持したほうがよいでしょう。『サドンデス』の編集部では傭兵飛行隊やGメンを本社を守るために雇っています。そして彼らはF-18ホーネットで飛んでいます。明らかに我々の空域で出会ったA-10に生存の機会は… ーちっぽけな編集者]

彼らのせいではないのだが、多くの傭兵は余りにも国際的な税法を知らない。ここで私はアメリカの領域で仕事をしたがっている読者に警告を発したい。

トルコの空を飛ぶ全ての飛行隊は、TDF（トルコ政府軍）の命令で『傘税』と呼ばれる税を払わなくてはならない。これは外国の標的に対する攻撃命令から免除されて飛ぶことを許可する命令である。(少なくとも公的レベルでは）そしてこの保護の代償として我々の収入から差し引かれる比率は、多くの飛行隊にとって妥当なものに思える。にも関わらず『公的な』アメリカ領土内（連合から脱退した国を含む。たとえ脱退が規制事実だったとしてもアメリカ政府はそれを認めない）で我々の行う作戦行動は重大な問題とされる。

我々傭兵がアメリカでの仕事を行うとき、アメリカ軍はその領空内への侵入を黙認してきた。しかしIRF会計係はそうしない。年度末の近づく1月か2月になると突然、請求書が郵送されて来る。アメリカ

領土内での破壊によって生じた利益に対するIRFの課税請求である。すなわちアメリカ政府はアメリカ市民の私有財産の破壊を認めているのである。アンクルサムならば一切れのパイが与えられる。

これははっきりとした強奪である。思わずあなたは言うだろう。

「私が支払うのと支払わないのではなんの違いがあるのだろう。私はトルコで行動し彼らを地獄に送った」これは私の言ったことではあるが、なんとしても私が悪い。約60万人（会計係、監査役、兵士を含む）を雇うIRFは現在世界最大のテロ組織である。もし彼らがあなたをみせしめにしようと決心したならば、彼らは自分自身、もしくは人を使ってあなたに襲撃を掛けてくる。私の飛行隊『トロッグス』はIRF子飼いの二つの傭兵飛行隊『ジャッカル』と『バイパー』による奇襲を受け、壊滅に追い込まれた。たとえアメリカが破産してもIRFには青物がうなるほどある。彼らは小さな反逆も許さない。ジャッカルは小さな悪事の盗みでも真剣にやる。プリデュークスはその行いにより地獄に落ちるだろう。

現在、私は完全に破産し、身を隠すことを余儀なくされている。私はあの襲撃の唯一の生存者だ。IRFは私の人生を消しさった。私は読者に警告する。こんな事があなたの身に降り掛からないように。

－追われた者

［ちょうど我々は来月、おそるべきIRFの世界侵略を特集する記事を企画している。どんなに控え目に言っても『追われた者』の言う全ては真実だ。アメリカで行動が始まる前に読者はよく考えて欲しい。今月の記事のジャッカルのジャン・ポール・プリデュークスとのインタビューの際、この件に触れ、弁明を求めた。彼はポケットから20ドル札の分厚い札束を取り出してニヤリとした。そして私に『追われた者』の消印を尋ね、未完成の仕事は嫌いだと語った。私は情報を差し控えたが、社に戻ってみると机の上が荒され、手紙が消えていました。『追われた者』は今すぐ居所を変えた方がよいでしょう。　一編集者］

私は多くのMNCS（多国籍企業－編集部注）が自前の飛行隊を持つことを懸念している。彼らが空中艦隊を持つことによって、我々の傭兵の市場がどんなに大きな影響を受けるのかを。これはイスタンブールから切り放なされたところで、会社間の争いが始まったことを意味するのでしょうか。

－マーク・グレゴリイ　4805
ファンリイ　カッデシスタンボウル
イスタンブール　トルコ

［そうではありません。MNCSは厳密に防衛のためにF-15とF-16の飛行隊を持っています。単純な事実として非常な危険をともなう攻撃の時のだけ、プロの飛行隊を雇う方が経済効率が高いのです。企業は1500から2000万ドルで飛行隊を雇います、彼らが独自の戦力で行動するには2000万ドルは必要とされます。どちらがよい選択なのかは明らかでないでしょうか？　一編集部］

---

by バージル・ビートルバウム

THE WILDCATS

－ワイルドキャッツ、ベンチャービジネスとしての飛行隊－

［編集部注：この記事は最初、ビートルバウム氏が彼自身でワイルドキャット飛行隊の行動の概観を書く予定だったが『サドンデス』では彼の助けを借りて様々な飛行隊のメンバーへのインタビュー、バックボーンとなる情報などをコーディネイトする内容に変更させてもらった。しかしこれは個人的な意見だが、ビートルバウムはこの仮想記事を彼の飛行隊のための恥知らずな内容に変えてしまった。もっと冷静なワイルドキャッツ観をみたいならばこの記事ではなく『潜入レポート：ワイルドキャッツの２日間』を参照してほしい。］

●誰かがワイルドキャッツの話をしているのを聞くとあなたはどう思いますか？

・この6年間、ワイルドキャッツは世界と地域双方の援助をささえるという任務に専門的かつ継続的に当たってきたということをどう思いますか？

・ワイルドキャッツがあなたに最高のサービスをするために可能な限りの費用をかけ、完璧に整備された最高のF-16だけで飛行しているということをどう思いますか？

・ワイルイドキャッツの作戦成功率が86％（イスタンブールの平均より22％高い*）にも達するということをどう思いますか？

・我々の引き受ける仕事の機密が100％保証されているということを理解しています？

・そして誰かがワイルドキャッツの話をしているのを聞いた時、あなたは道徳という言葉を思い浮かべますか？

事実を見てみよう：

イスタンブールの全ての飛行隊の中で、ワイルドキャッツだけが道徳的な考えに基づき、提示された使命を拒絶するという噂を持っているのは事実なのです。

●しかしこれが全てではない！我々のパイロットはイスタンブール中の野蛮な飛行部隊の中でも、最も多くの経験を積んできている！我々の殺傷率を見ればそれは納得できるだろう。我々の司令ジェームズ・スターンはこれまでに数多くの作戦に参加しこれを指揮してきた。実際、ワイルドキャッツに所属する全てのパイロットは、この部隊に参加する前に最低2回は軍事行動に参加している。

●我々はするべき仕事を手にいれた！『道徳的』飛行部隊という噂により、残念ながら多くの潜在的雇用者は我々と嫌々接触する。しかし信じて欲しい。我々の提供するサービスと我々の能力を見ずに判断すると、あなたは負わなくてもよかった大きな損害を被ることになるかもしれない。仕事の依頼に大きすぎることも小さすぎることもない。我々はいつも仕事の話を待っている。我々が選択する使命の種類からくる一種の偏見によって我々を避けないで欲しい。悩むことはやめよう。ワイルドキャッツの会計士として、私はどんな汚い仕事でさえ受け入れるように懸命の努力をしているということを保証する。

●我々はあなたがたを気にしています！

我々ワイルドキャッツはあなたがたの希望に十分答えられる能力を持っています。我々はあるトルコの飛行隊によって莫大な損失を負っています。もし我々が鼻をつまんだら、あなたがたは金を払いますか。考えて下さい。包囲から解放されるためにどれほど多くの傭兵が助けたかを。ワイルドキャッツと飛ぶ限りあなたは安全です。

●我々はあなたを必要としています！

あなたが我々を使ってみようと思うなら、我々の行動はあなたに利益をもたらすでしょう。

●幸せはあなたの手で！

［*イスタンブール平均はビートルバウム自身による調査資料による］

WILDCATS DOSSIERS
ワイルドキャッツ調査書

ミゲル・シュレイダー「ゾロ」
ー精密の化身

「ゾロという名前には二つの理由があると思う。ひとつは十代の頃、生まれ育ったバルセロナで牛と戦っていたため。もう一つの理由は、私が非常に正確な操縦技能を持つからだ。私は伝説の剣士のようにミサイルに精通している。私が思うにどちらの性質も同じ才能に由来する。すなわち鋼の神経を持つということだ」
「しかし、彼は間違うこともできる」
ミゲルのチームメイトが素早く口を挟む。シュレイダーはめずらしく微笑んだ。

彼の『鋼の神経』という主張は単なる大言壮語ではない。彼はドッグファイトのベテランであり、2005年の中央アメリカブロック闘争にその名を残している。ミゲルはいかに素早く、効果的にジェット機を移動させるかを知っている。
「私は他の連中のように、弾をばら撒き、運良く敵に当たることを祈ったりはしない。私はもっと後でもっと多くの敵機に遭遇したときに、ヴァルカンに祈るのがよいということを知っているだけだ。同様に私は確実に当たると思ったときだけミサイルを発射する。敵が逃走しうる僅かな可能性をあるときでさえ決して発射しない。私がミサイルを発射する時、それは一人のパイロットが死ぬ時だ。私は死を覚悟する時間を与えない」
彼は感慨深げにあごの不精髭を撫でた。

「どうすればいいかということだけだ。私はそれ以上のことは考えない。しかし、それが大事なことなんだ、ちがうかね？」

もっと特殊なのはこの普通ではないパイロットの気質の中にある炎と氷の共存だ。ミゲルの暗い顔から誇り高く、暴力的な目が見すえる。右頬の青白い傷跡、危険な顔立ちにも関わらず、彼の声は愁いを含んで欺くように柔らかだった。

「彼は多くの事を見すぎた」
司令のスターンは言う。
「彼は必要以上のものを支払った」

スターンは多くを語らない。しかし、それはシュレイダーのトムキャットが中央アメリカのジャングルで撃墜され、ニカラグアの捕虜収容所で過ごした18カ月間のことだ。おそらくこのことは、南アメリカ政府での脅迫観念がシュレイダーの中で今も続いているということをしめしている。

「たとえそれがなんであれ、私はワイルドキャッツを『政治的がらくた』と考えています。すべては政治的であると考えるならば、政治に興味を持てない人がいるということが私にはわからない。私は中南アメリカが、次の国際紛争の大きな温床となりつつあると感じている。しかし誰もそれに気づいていない。ニカラグア、ブラジル、ペルー、そしておそらくアンデス・マヨルカも。これらの地域は遠からずトラブルに巻き込まれるだろう」

いい仕事になりそうですねという私の質問に対し、ミゲルの目は怒りに燃え、彼はこう答えた。

「私はそういう仕事はしない」

誰も経験にもとづくミゲルの言葉を否定できない。

ライル・リチャード『ベースライン』
ー謎の人

ライル・リチャード、38才。いくつかのアメリカの軍事行動に参加、物静かな、しかし愁いに沈んだ男である。故に彼が我々のインタビューを断わっても誰も驚かない。したがってリチャード中佐の情報はアメリカ海軍の公式記録に記載されたものに限定される。この熟練したパイロットであるリチャードは、米海軍空母サラトガで最初にその腕を磨いた。彼に関する初期の記録には以下のようにある。
「優れた知性と集中力を持ち－軍事実績に限る－旅と異文化の学習に特に関心を抱く。理想的な士官候補」

彼はシローでの災難の前に中佐になっている。後に海軍を去ったのは、おそらく意味の無い母艦の損失による軍事体制への幻滅からであろう。リチャードの最初の任務は1991年の『砂漠の嵐』作戦、サラトガからイラクの目標への簡単な出撃飛行であった。1994年、イラクの核攻撃能力を抑止するためにアメリカ軍がサウジアラビアに進駐したとき、彼は初めて砲火による洗礼を受けた。

彼が最初の味わった苦い味はヨーロッパにおけるブーツストラップ作戦だった。この時アメリカは、世界的な民族自決主義の潮流の広がりを阻止するために12月革命を抑圧する共和国に援軍を送った。行動の偽善は表面上は基線を失っていないように見える。心理学で言う『承認と尊重の喪失』である。

彼の愛国心に疑問が生じたことは想像に難くない。彼の経歴を認める司令官は次第に少なくなり、彼の経歴はそのまま終わるかに見えた。そんな時、常に異端者であったジェームズ・スターンが彼を呼び寄せ、当時、スターンの指揮下にあった空母シローの戦闘グループにリチャードを配属した。以来2人の仲はうまくいっている。そしてその結び付きは空母シローの破壊とワイルドキャッツの発足にまでつながっている。

グウェン・フォレスター『フェニックス』
ーアナーキスト

グウェン『フェニックス』フォレスター大佐は、ニカラグアでの救出任務で飛んだときに、このコールサインがつけられた。
「私はヘリでジャングルの外へ傷ついた兵士達を運び出すために出動しました。高射砲の射撃による砲煙で空は覆いつくされ、自分がどこにいるのか、どこに向かっているのかすら判りませんでした。しかし第256部隊の兵士の生き残りを救出するためにどこへでも着陸しました。たいしたことではありません。」
彼女は一息入れてニヤリと笑った。
「再び離陸しようとしましたが、それはひどくガッツのいることでした。煙で高射砲が見えませんでしたが、私にはそれがどこにあるか判りました。我々がかすり傷1つ負わずに脱出できたので、その時から私はフェニックスと呼ばれるようになりました。」

彼女は英雄的な行動を取ったつもりはなかったが、フェニックスは勇敢と評価され、その結果大佐に推された。しかし皮肉にも、この獰猛な独立心と慣例の拒否は、彼女を解任させたがっている上官たちの賛成意見を集めることとなった。
「実際のところ、あの親分が私をどうしたかったのか理解できません。私は命令に不服であったことはありません。しかしヘッドホンからの罵り声は私に負担でした。要するに、ここに地面に落ちろと命令を出す上司がいたということです。一体彼らは何を考えていたのでしょう？問題の全ては力の原理です。

愚かな力を与えれば、どんな時もそれは絶対的に腐敗させるでしょう。彼らの肩にモールがついたとき、彼らは貴方に絶対服従を強要するでしょう」

これらの意見は上司を混乱させた。フォレスターは名誉ある解任を与えられた。特にそれ以来、差別は友好に劣るという確信は高まった。
「アンクルサムに何ができるっていうの？」
銀のような笑いがフォレスターから放たれた。それは爪のような彼女の強靭な態度と対称的だった。
「そんなことをしている女の子見えるかしら？あなたはそれの出来る可愛い、誠実な指令官でなくてはならない」

炎のように赤い髪、厳格な青い瞳、飛行機に捧げた不確定、フォレスター大佐は、どんな事でもやれそうな気がする。

ジャネット・ペイジ『ヴィクセン』—美しく執念深い

ケベックで傭兵の募集をしたとき、ワイルドキャッツの中でジャネット・ペイジだけが、実戦に参加した経験を持っていなかった。18才での冷徹な決断以前にジェットパイロットになることを保証されていたのだという。その地方のすべての飛行機野郎が彼女のレッスンを希望するくらい彼女は美しかった。90年代後半の間にケベック中の傭兵を減少させるために、使命の公開を手にいれることはたやすかった。ジャネットはその説得力を使って3年間の経験の中で、それらの使命の達成がいかにたやすいかを証明した。それにより彼女はどんな危険であるかに関わらず、飛べことのできるパイロットという評価を得た。
「私は鼻が汚れるのを恐れませんでした。それは確かです。私が考えていたのは女性が尊敬を得る方法だけ。そしてそれは正しかった。私はしばらく中国で銃弾の中を走り、NATOの封鎖に穴をあけました。そんなことは数え切れません。ひとつはおもしろい、しかしもう片方は割が合とき、どちらの報酬を選択しますか？」
『ヴィクセン』という名前についてたずねると、彼女は私をにらみつけ、顔をしかめた。
「私の美しさは道具です。よく使います。私を利用しようとする男は結局は私に利用されています。私は自分で『ヴィクセン＝雌ぎつね』などといったのではありません。カナダのパイロット達が私をそう呼び、いつの間にか定着したのです。望むなら今、その名を捨てることもできますが、私は警告としてそのままにしています。私のルックスに引かれたものは、誰でも逃れられないということを知るべきしょう。私は手強いですよ」

彼女を「タフ」と言うのは正しい。このイスタンブールで、ジャネットは使命を達成するためには一切の妥協を知らないパイロットとして知られている。
「私を本能的な殺人者と呼ぶ人もいる。私はそれを市場性と考えています。一般的に最初の目的を実行せずに出撃から帰ったパイロットは長くはありません。あなたはこの仕事で孤独な評判を上げる必要はない。あなたは最後の飛行と同じくらいすばらしい。そして私は勤勉に働いてずいぶん遠くまで来たが、まだ究極の目標に至るまでに必要なものがあります」

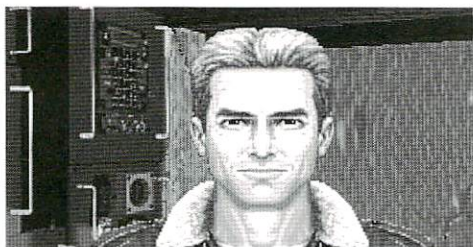
それは何でしょう？

「女の子には秘密がつきものよ」彼女はまじめに答えた。瞳のきらめきは無意味な質問をするものではないといっている。あるいは彼女の頑丈な鎧に対するよけいな一言は怒りをかったのかも知れない。明らかに彼女は敵に向ける銃と同じ正確さで、自分の未来の人生を描いている。しかし、実際にどんな未来が彼女を待ち受けているかは、時の流れだけが知っている。

ビリー・パーカー『プライム・タイム』ートップガン

ビリー・パーカー中佐、あるいは『プライム・タイム』は、残りのワイルドキャッツと違い、平和時には予期できない36名の死者を出した第149戦術戦闘飛行隊の事件から4年間の後に現れた。
「ハイ、何を話せばいい。空のボギーかい、弾薬を投げつけることかい、それとも誰かさんのたどった歴史かい」
明解だ。歴史がパーカーの意図する対象だ。
「俺の表現は、お前らの双方が歴史を作るか、お前自身が歴史になることだ。ワイルドキャッツの多くの連中が残念ながら30に近づいている。それは疑いない」
彼は悲しみをあざけって頭を振った。そしてニヤリと笑った。
「しかし24の時が、俺にとってのプライム・タイムだった」
彼は自分の異常な成功は何によると考えるのか。
「集中力と才能だ。俺の才能は空中戦のためのものだ。いま俺は最高のファイターパイロットとして、何をやればいいのかがわかっている」
「俺は18になったその日にUSAFに入隊した。20才で第149飛行隊の中佐補になり、その4年後にベルトに刻んだ149での撃墜記録を持って、名誉ある引退をした。今、俺は自由だし、前からずっとやろうと思っていたことをやる準備をしている」

スターンの評価によれば、彼は原則という鉄のブランドを持った強靭なリーダーである。パーカーは認めた。
「スターンはタフだ。何の疑いもない。彼のやり方は一般的な軍隊のそれではない。スターンは命令をするが、俺達を独立した人間として扱う。俺はチームのメンバーだ。しかしチームは俺を吸収しない。それは別の問題なんだ。だからこそ俺は、ワイルドキャットにサインをしたんだ」

クレイトン・トラビス『テックス』ーロデオ・カウボーイ

トラビスがUSAFに参加したとき、彼はテキサス州アマリロのジャクソンでハイスクールボーイをやっていた。
「俺はそのとき、野生馬の背に乗っていた」
彼は回顧する。
「プロなんかじゃなく、ただ単におもしろがって乗ってただけさ。その日は例年のアマリロロデオ大会が開催されていたんだ。何かの訓練だったんだな、ジェット機が爆音を轟かせて会場の上をかすめるように飛んでいったんだ。その時、初めてジェットって奴を意識したよ。ロデオなんか放り出して、基地まで車を飛ばした。そしてジェットに触れた」
『テックス』と呼ばれている29才のトラビスはすねを打って笑った。
「採用官が俺をいいカモだと思っているのがよくわかった。ロデオ以外のことは何も聞かれなかった。そしてしばらくすると俺をフライトシミュレーターの所へ連れて行ったよ。シミュレーターを降りてから5分間は歩けなかったな。でもね、その時俺は自分のいるべき場所を見つけたんだよ」
ハイスクールを卒業してすぐに空軍に入った。それから4年の後、軍を離れた。
「俺は自分自身が、誰のために撃ってるのか判らなくなっていた。それなのに危険は自分であがなわなくてはならない。俺は誰かのために何かをするというのが、嫌になっていたんだ」
テックスは古風な一匹狼のイメージがある。ひょろりと背が高くいつもカウボーイハットを頭に乗せている。彼はF-16のコックピットにいるよりも、焚火の横に並んでいるほうが似合いそうだ。
「俺は一人で働くのがベストだと思っている。しかし、

俺が決断するまではチームで働くのも気にならない」
スターンがワイルドキャッツのチームワークを強調するのを考えるとこれは驚くべき態度だ。ジェームズ・スターンの命令に関してテックスは以下のようにコメントしている。
「ある日俺は、このかっこうでランニングをしていた。しかしそのあいだに、私は働いているぞと言っていた」

SELL & SCRAMBLE

［潜入レポート］ワイルドキャッツの２日間

「この機密作戦に対する詳細の取材許可を与えてくれたCEOとMAXIMA局に感謝します。規約により、いくつかの事実（名前や日付等）は変えてあります。それによりミッションに関する全ての詳細な行動やワイルドキャット飛行隊を巻き込む要素（行動、計画、その他）は読者の目の前に生き生きと再現される。一編集部」

第１日

1000時

ウスクダラの朝の混雑を抜けてセリミエバラックの北東に進む。ついにワイルドキャット基地に至る、狭く汚い道についた。この基地を愛情を込めて『巣』と呼ぶワイルドキャッツもいる。私のジープは一匹のマラムートに吠えられ、迎えられた。基地の崩れかけた建物から吠える犬を抱いた歩哨が出てくるまで、基地はまるで廃虚のように見えた。彼は不審そうに私を見た。UZIの銃口は下を向けられていたが、トリガーに指が添えられていた。
「私は『サドンデス』のデュームです」
私は彼に記者証を見せた。彼は注意深くそれを見ると軽く敬礼をした。
「ここに車を止めて結構です」
「皆さんは？」
「寝ています。」
面倒そうに答えた。
「格納庫でコーヒーでも飲んでいて下さい。そのうち起きて来るでしょう」

1233時

ようやく１人の男、事前資料によるならばクレイトン『テックス』トラビスが、破れたジーパンにボタンの無いウェスタンシャツという姿でふらふらと格納庫に入ってきた。彼はイスタンブールの太陽をちらりとみるとコーヒーを作りながらこちらを見た。
「誰だおまえは？」
「デュームというレポーターです。『サドンデス』のインタビューに来ました」
「オー」
彼はコーヒーを飲みながらウィンクした。

ライル『ベースライン』リチャードが格納庫に入ってきて私を見てテックスを見た。
「雑誌だと」
テックスが説明した。

『ベースライン』の対応はもっとそっけなかった。彼は頭を振って呟いた。
「この辺は平和じゃないぜ」
その後30分、ワイルドキャッツのパイロット達はコーヒーポットの前には立ち止まったが、私は全く無視された。1327になりやっと、正午にも関わらずネクタイとスーツに身を固めた背の低い禿げた男が格納庫に入って来て私の腕を取った。
「長らくお待たせして本当に申し訳ありません。時間についてもっとしっかりしなくては」
私は彼がワイルドキャッツの会計士、バージル・ビートルバウムだと確信した。私は電話代や耳皮でサービスに多くの時間を費やしたにもかかわらず、この道具は役に立っていなかった。
「勤務日だといいませんでしたか」

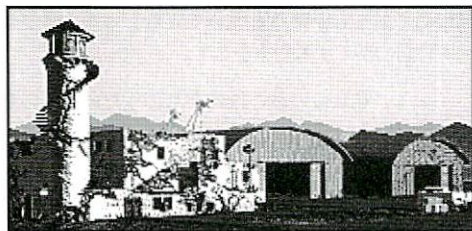
彼は強くうなずいた。
「そうです、私はあなたをワイルドキャッツの勤務日に呼びたかったのです」

私はぼんやりと彼を見つめた。
「これについてはあやまります。ところで遅い昼飯でもどうです」

彼は腕を抱えて私を格納庫の外へ連れ出した。私は背後で飛行隊の連中がくすくす笑うのを聞いた。理由がわからなかったがバージルがぶつぶつ言うのを聞いているうちに、いい考えが浮かんだ。
「私たちと同様に仕事中なのです。ワイルドキャッツの勤務は、セリムが開く2000まで始まらないわけではありません。それは仕事を探しに行くところです。そしてそれを少し返します」
少年達を失望させ、汚してしまう会計士として、彼は心から笑った。私は弱く笑った。格納庫で待たされている間に飲んだ6クォートのコーヒーで吐き気を催していた。

たぶん6だったと思う。コーヒーで時間をはかると分はオンスに相当する。

彼は私をオフィスに連れていき、しばらく席を外すと大きなパンとマスタード、ソーセージを抱えて戻ってきた。彼は私を引き留めて話し続けた。彼が私のパンの皮を切るのに気づいたが黙っていた。
「いい調子になってきた」
バージルはネクタイを正すと私にリクタスの帽子を見せ、食後の一服の間中微笑んでいた。
「私たちのことをうまく書いてくれることを心から望みます」
彼はウィンクして笑った。

私はマスタードつきのソーセージをむりやり飲み込んで笑った。

1510時

私はトイレにいくという口実でバージルから逃れた。トイレの窓から逃げ出すと他のワイルドキャッツを探してうろついたが、パイロットは見かけなかった。彼らは私から隠れているように感じた。私はさらに基地の探索を続けた。

この『巣』はハイテクとレーダーシステムを支える、壊れかけたセメントパネルと鉄骨の固まりだ。錆びた格納庫にはF-16が格納されている。その歴史は同様に興味深いものがある。

2次大戦時、この基地は仮設滑走路でしかなかったが、ここから多くの航空機が出撃し、幾つもの作戦の遂行に貢献した。やがて戦争は終わり、それから50年もの間、この基地は放置され利益は生まず、荒れる放題に任されていた。

この基地を次に役立つものとしたのは、ルイス・サイモンというコカインの密売人であった。彼はここを密輸の仲介地点として使った。政府は94年に査察を行い、サイモンの密売品を押収した。

そして2004年、ジェームズ・スターンが彼のワイルドキャッツを育てるための作戦基地としてこの基地を選定し、長期間使用することになったのである。

スターンとプリデュークスは、この廃虚寸前だった基地に大量のハイテクを導入した。現在では『巣』は作戦の専門基地となっている。しかし外観は強い午後の日差しに炙られ、塗装ははがれ落ち、泥と麦藁の下に煉瓦が見えている。そして所々には赤黒く汚れた銃痕がある。それは過去の繁栄と略奪の歴史を語り掛けるようだ。誰も話しかける者のない時間の中で、私は光を見つめて立ちすくみ、古い兵士の声を聞いたような気がした。

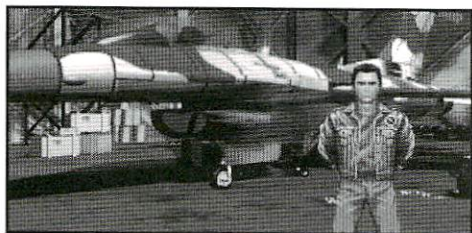
誰かが時間を教えてくれた。

『1615』ミゲル・シュナイダーだった。思いがけ

ない言葉に勇気づけられ私は格納庫について行った。そこで彼はF-16のメンテナンスを整備工に指示していた。中央アメリカブロックコンフリクトのベテラン、『ゾロ』シュナイダーがワイルドキャッツのシニアメカニックであることに私は驚いた。

一般に一流のパイロットは機体の整備と修繕を格下に考えている。私はこのことをシュナイダーと部下に聞いた。
「それはエリートの態度だ。メカニックサービスはパイロットに取って重要な機能だ。それは魅力的ではあるが、そのために飛ぶのは悪い仕事だ」
彼は整備士をさして言った。
「彼らがいなければ私は地上に戻れない」

シュナイダーは最初ぶっきらぼうだったが、彼の関心のある問題になると次第に活気づいてきた。
「私は南アメリカの問題に哲学的関心を持っている。全ての国は第3世界からはい上がろうとしている。(古い言葉だがアメリカ経済の崩壊を考えると) しかしこれらの南アメリカの政府は、アメリカの理想を砕くことを熱望している。彼らは誰もがそうであるように繁栄を望んでいる。しかし残念ながら衰退の機会が数多く横たわっている。通常は隣国との紛争よりも、自国の富の増大を好む。同じボートに乗り合わせているようなものだ。これは境界からの流出の説明になる。あなたが得たり失ったりするのに政治的、経済的構造は関係ないんだ」

私の南アメリカに関する知識は限定されている。話題を変えようと思った。
「ジェームズ・スターンについてうかがいたい。いつ彼に会えますか?」
「スターンが現れたときだ」
シュナイダーはむっつりと答えた。明らかに彼の関心を失ったようだ。ゾロと呼ばれる男は、私に背を向けると不機嫌そうに去っていった。そして彼の愛しい飛行機にその注意を向けた。

1722時

私はビリー『プライムタイム』パーカーと、グウェン『フェニックス』フォレスターが中央滑走路からこちらにやって来るのに気づいたが、彼らは格納庫に入ってしまった。インタビューしようと急いで後を追ったが、追いつくとビリーは気むずかしそうに腕を組んで立っていた。私が躊躇していると彼はささやいた。
「ヤー、ヤー、おいで気どりやさん、時間がないんだ」
「なんですって」
「急げと言っているんだ」
「よく聞いて下さい。私はデューム、『サドンデス』の記者です」
「何だ、サインが欲しいんじゃないのか」
フォレスターは吹き出した。パーカーが説明した。
「いつもねだられるんだ」
彼はぶつぶつ言った。説明は続く。彼が田舎の英雄で航空ショーで姿を現すと他の傭兵を避けて彼にファンがそういうリクエストを頻繁にするのだそうだ。傭兵は人気がないがビリーは違う。
「ヘイ、もしあなたがそれを得ればー」
彼はグウェンにウィンクをして握手をして顔をしかめて行ってしまった。プライムタイムは瞬間彼女を見つめて顔をしかめると急いで立ち去った。後でセリムの店で話をする約束をして。

イェイ、私は彼のおこぼれをちょうだいしているのに気づいた。請求書は郵送で。

1902時

静かな夜に銃声と砕ける音がする。私は格納庫で皮なしソーセージとマスタード付きサンドイッチを食べていた。(皆さんご存じの誰かが準備してくれた) そして過去の散って行ったパイロット達に思いを馳

せていた。空は暗く、地平線に赤い光がひらめいていた。私は凸凹の地面につまづきながら断続的な音について行った。そこでテックスが管制指令塔の横に立っているのを見つけた。彼は45口径のタウルスを持ち、私に気が付くとにやりと笑った。何をしているのかと尋ねると彼はこう説明してくれた。
「そうだな、俺は狩りが好きだ。イスタンブールにはおもしろい遊びが何もない。でも私たちは多くのネズミを手に入れられる」
彼は外を指した。小さな影が屋根をかすめて飛び跳ねている。そのシルエットは日の沈んだ空に映っている。
「彼らは日中は隠れている。しかし黄昏時になると彼らはいたるところに出て来る。大きな醜い雌だ。彼らはウスクダラから来る。俺が言うのは21世紀の民族について言わなければならない汚い場所さ。君は通りにクソをしない。ネズミはクソを喰うかい」
私は肩をすくめた。
「彼らはそうしなければならない」彼はもう1発打った。
「バージルは毒を頼んだ。しかし、それは無駄だった」
彼は続けた。
「直接のアプローチが常に最善だ。ここの誰かさんみたいに遠回しは嫌いだ」
私は何をいいたいのかを彼に尋ねた。
「俺の言いたいのは、傭兵になった者はつまらない紛争を汚いといってやめて行くということだ。わかるかな」
「ではどうしてあなたは続けるのですか」

テックスは首の後ろを撫でると一瞬考えた。
「私はスターンを尊敬している。間違えないでくれ。彼はいかれた考えを持っていると思う。しかしいまに出会った人間の内では最高の男だ。いつか彼が引退したら大きな変化が起こるだろう」
「どんな変化ですか」
「聞いてくれ、それはまだ俺がワイルドキャッツの命令を受ける前の事だ。いくらかの金を作り始める時だと、みんなに納得させたときからそう遠くはないだろう」
「あなたはワイルドキャッツの道徳的行動の合意がスターン亡き後に崩壊すると思いますか」
彼はうなづいた。
「しかし俺は事態を立て直すだろう」
テックスはピストルを見つめた。
「ずいぶん前のことだ。俺は格納庫の近くで今みたいにネズミを撃っていたんだ。そしたら跳弾が燃料タンクに穴を開けてしまった。みんなはかっとなった。でもスターンは奇妙なことに二度とネズミを撃つなといっただけだった」
「彼はそれを禁じたのですか」

テックスはうなずいた。そしてもう1発打った。酔った笑いが顔に広がった。
「あいつらの鳴く声が聞こえるかい」

私は頭を振った。
「銃声だけだ」

テックスは肩をすくめた。
「名ばかりの才能さ」

2040時

私たちのジープはセリムについた。いまだにスターンには会えない。明らかに彼は一人で先頭を行っている。みんなはカフェで会えるといっている。実際、ワイルドキャッツのバーでの無駄な時間や影のコーナーでの裏取引は、いかがわしい変化を生じていた。私はそこで初めてスターンを見た。彼はテーブルに座りぴりぴりとした雰囲気のエリートのように交渉していた。神経質に辺りを見回し、あたかも面倒が起こるのを恐れているようだった。ライル・リチャードは一人でテーブルに座っていた。スターンの後ろに何人かが並んでいた。彼は緊張した姿勢でスターンを警護しているようだった。武器は見あたらない。リチャードは口の堅いチームメイト以上に彼自身の個人情報の公開を嫌った。私は彼の沈黙を撃ち破ろうと彼の横に座ることにした。個人的な質問の後、スターンについて聞いた。

「私はあなたの司令官は大変難しい経歴を持っていると考えている」
ライルは人混みに目をやると異議を唱えた。
「簡単に言えばシローの敗北さ。それがこんな有名な経歴に追いやったのさ」

ライルは私を鋭くみた。
「それについて知っているかい」
「全ては知りません」
私は答えた。少々窮屈で白状した。彼の視線は何故か私を動揺させる。
「2001年のペトロ戦争の間、スターンはアラスカ海岸沖に位置した空母シローから空爆を開始した。その任務は2頭機のポイントを守ることと、アラスカ独立軍に対する陸海共通の襲撃だった。シローが全ての手に記録されたとき、連合国のアラスカはアメリカのものとなった。この不運はスターンの海軍での経歴を終わりにさせた」
「ひどい」
リチャードは静かにいった。
「スターンはその責任を終えている。彼は海軍を引退している。調べればもう少しわかるだろう」
「確かに彼は辞任した。しかしどんな選択が出来たろう？彼は残忍な作戦命令で核を捨てた。そしてアメリカ戦争をそれにより崩壊させた」

リチャードの言葉がかけめぐる。私が最初に座って以来、彼の目はスターンを見ていない。
「直ちにこれを得よ。：スターンはワシントンの馬鹿どもに警告した。行動は最初から運命だったのだ。4つの他の攻撃地点があった。－カナダ、ロシア、OPECに。彼らは実行を待っていた。アラスカの作戦から正義は防衛のために変わってしまった。ペンタゴンの馬鹿はアラスカの人民が望み、外に干渉する6カ月まえに機会を失った。5月では全く駄目だ。アラスカはいってしまった。リチャードはスターンをちらりと振り返った。
「その上、あるアメリカ人は自由でありたいから他のアメリカ人を殺すことを好まない。シローはアラスカがなくなる前に地獄を見せてしまった」
「2人だけの生存者」
「そうだ」
リチャードは目を落とした。

「たった2人だ」
スターンの指示によるおそるべき破壊を聞いた。リチャードはすぐ立ち上がった。手のピストルは希薄な空気で出来ているようだった。彼は全ての筋肉を緊張させてねらった。硬い壁に乾いた音が響いた。私は椅子に戻り何が起こったのかを確かめた。壊れた水差しの横でウェイターが頭の後ろに手を組み、這い蹲って半狂乱で叫んでいた。
「撃たないで下さい。事故です。撃たないで」

カフェの様々な戦略的ポイントの中でガンをおいてゆったりとリラックスした腕をくんだ10人の男がいた。スターンはリチャードにうなずいた。リチャードは椅子に座り、ゆっくりとピストルを皮のジャケットにしまった。

何事もなかったようだ。リチャードはにやりとした。
「これが手づかみのものを注文するわけさ。ここではフォークを落とさない方がいい」
「わかりました」
「ぶかっこうなばかもの」
彼はいった。笑顔は消えていた。
「彼はチップを忘れた」

私の会話に対してリチャードは石のように黙った。

2237時

夜の仕事は無事に終わり、基地の雰囲気は活気に満ちていた。スターンは分け前を得た。少しはまともな分け前のようだ。詳細はわからない。少なくとも朝までは彼らは安心して息をすることができる。彼ら自身を売るというプレッシャー、明日の滞在先に注意を向ける。しかし今夜はスターンと共に酒を飲んでドアに向かって寝ている。彼の冷酷な外観と彼のチームはウィンクして親指を立ててみせた。か

れの酔った姿を見て私は彼を見失った。数杯飲んだ後、彼自身もくつろぐのだろうと思っていたが彼の責任感は彼をあまやかなかった。リチャードと共にスターンは巣に帰っていった。パイロットを排ガスと共に残して。

金持ちは違う時期に来るのだろう。不安定な傭兵の生活。これが祝福の根拠だ。多くの傭兵部隊は絶え間ない破産の瀬戸際にいる。それは安定とは程遠い。イスタンブールでは孤立無縁の生活がみられる。別の日、別の弾薬、別の葬式、別の金。法律と破壊というどうしようもないコンビネーション。私はそれをカフェでのリチャードが抜いた銃にみた。シュナイダーのカフェへの愛情と、格納庫のペットへの関心。あなたは死を目にするまでは生を感じられないだろう。

グウェンとビリーは、私との後でという約束を破って暗いコーナーにいた。私はジャネット『ヴィクセン』ペイジが、離れたテーブルにワイルドキャッツの一人といるのを見て驚いた。親密な話をしているように見える。シュレイダーはバージルとバーで話している。特別の話ではないらしい。私はセリムを後にしてタクシーで基地に帰った。私は明日が、今日のような怠惰な一日でないこと悟った。

第2日

0500時

まだ早い。真っ暗だ。テックスは屋根の上の惨めなネズミを見ている。しかし、あえて朝の静けさを破ろうとはしない。彼の同士は格納庫の中。彼は哀れみを含んだ視線をネズミに与え、同僚と共に中に入っていった。

長いテーブルにはワイルドキャッツの朝食が並べられている：コーヒー、アスピリン、胃腸薬、ソーセージ、マスタード、皮付きパン、ワイルドキャッツ達は落ち着かない様子でスターンの説明を待っている。二日酔いで頭を抱えて不平を言うものもいる。まるで不可解な呪いがかかっているようだ。神経質な会話も多く、陽気で無礼な話も飛び交う。チェズバージルの料理に皮肉を言うものもいる。バージルは予算のことを言う。

やがてスターンが現れた。部屋に静寂が訪れる。スターンは落ちついた、しかし、格納庫の外に通るぐらいの声で話し始めた。
「MAXIMAゴールドカードの返事がきた」

グウェンがやじった。ビリーとテックスは交換した。リチャードは不安そうだった。ジャネットは切望していた。ミゲルはびっくりしていた。反応は様々だが耳を傾けていた。

MAXIMAゴールドカードとは世界最大のカードで、最もわいせつで退廃的で豊かな大金持ちだけが持つことのできるカードであり、それは使用者に無制限のクレジットを保証する。SARANIMAXIMA社の電子クレジット保護ラインのおかげで、利用者以外は絶対に操作できない。しかしこのカードの古いところは、入会時に登録される親指の指紋をキーとした読み込み専用カードであるということだ。将来はハッカーや電子窃盗からのセキュリティーが開発されなければならない。

しかし、最終的なMAXIMAゴールドカードの将来はワイルドキャッツが握っている。このカードは電子的に廃止はできない。MAXIMA社が無効にしたいゴールドカードはMAXIMA審議委員会の公認メンバーによって保管される。そして物理的に破壊される。それがメンバーシップ特典である。

MAXIMA社は以下のクラウド・ギローム氏のようにゴールドカードの廃止を希望することがある。ギローム氏は先週市場で10億を越える損失を計上して、フォーチュン誌のベスト10から20位にまで転落し、審議委員会は彼のメンバーシップの維持は不適当とした。
「いま、ギローム氏はエーゲ海の島にいる。そこは諸君も知っての通り、厳重に守られている。そこが私たちの行き先だ。MAXIMA審議委員会のペトロ氏はギロームの島までいくために私たちを雇った。彼をギロームの前まで連れて行き、カードを無効にする」

スターンはギロームの防御を突破するための作戦を話し合った。100マイル以内の敵を発見し、対空装備付きのパトロールボート。トムキャットの戦隊。アムラーム、島に配備された対空砲、ギロームのマ

ンションを守る小規模だが高度に訓練された警備。スターンは私たちに水陸両用の襲撃用に組織されたワイルドキャッツが島の南端に上陸すると教えてくれた。襲撃隊の仕事はワイルドキャッツが上陸しやすいように地上の警備を排除するか厳しく勢力をそぐことである。彼ら自身の上陸のためにエアカバーが必要であろう。
「これは第1段階の襲撃であり、私たちの目的はギローム氏の居所を探り、ペトロ氏を彼に引き合わせることである。地上にも水中にも市民はいない。従って必要な戦闘はすべて許可される」

0700時

シュレイダーは彼らの使う飛行機の特殊性と運搬する軍需品について、チームメイトと相談するのに忙しい。彼は各機の内外、長短所、特徴、きしむ音が問題あるか無いかまでを知っている。それぞれのジェット機は修理回数が違い、パイロットはそれを知っている。ミゲルがどの機も万全であるといっているにも関わらず、パイロット達はどの機に乗るかで議論する。一方、スターンはバージルと予算を立てる。バージルはスターンに『認められるロス』として何人のパイロットが犠牲に出来るかを説明した。(バージルは「いない」といった) さらに物資をどのくらい投入できるかを説明した。バージルは特にこの使命では攻撃基地は必要ないと主張した。しばしば、ワイルドキャッツは海外に間に合わせの巨大なC-130ハーキュリーが輸送できるほどの基地を作る。そういった基地を作る費用は考えられないほどであり、契約で決められた手当も食いつぶしてしまう。幸いなことにギロームの島はエーゲ海にあり、バージルの主張によれば巣から作戦が実行できる。ペイジは、たぶん今パンの余裕があるかどうかが問題となっているだろうと冗談をいう。バージルはペイジを一人で放っておいて、余りの時間で活躍してもらえばよいという。

0723時

ついにグウェンから言葉をもらった。
「私はこんなカードのためにもう待っていられない」
控え室でいらいらしながら彼女は言った。
「彼は運命でもなんでもすべて自分の自由になると思っているのだろう」
金が人々をそうさせる。
「彼らは内面からくる自由を知らない。あれを買い、これを買う。太った猫の資本家野郎」

グウェンのヘルメットにアナーキストのシンボルがあるのに気が付いた。ミゲルが部屋に入ってきて、「そう思う。MAXIMAカードは不道徳だ。この金持ちのおもちゃ一枚で南アメリカ中を食わせられる」

全パイロットは準備体制についた。出撃は0800だ。

0754時

ペトロ氏が仮設滑走路に案内されてきたとき、全ワイルドキャッツのパイロットは飛行機の横に整列していた。彼は落ち着きなく辺りを見回して、緊張した笑顔を振りまいた。手に持ったヘルメットをくるくるとまわし、歯医者に向かう患者のようだ。特に痛いところを抽出したようだ。彼がファルコンの操縦席に乗る際にも具合いが悪いようにふるえていた。ワイルドキャッツの何名かが、彼が落ちたときのために横に待機した。シュレイダーは彼に装備を着けさせてからコックピットの前の席に乗り込む。ペトロの甘い顔はヘルメットに隠れた。私は彼が不安の顔を隠せてさぞうれしいだろうと想像した。私は私を知っている。

私はもう1機の複座型のF-16の後席に『プライムタイム』パーカーと搭乗した。彼らは私が観察者としてついてくることを認めた。地上の経験があるという理由と『サドンデス』の特権である。私は少し怯え黙っていた。私はパイロットではないしジェット機に乗ったこともない。
「がたがた飛行に行くか」
プライムタイムは私の前のコックピットにすわり元気に微笑んだ。
「でも、6G以上は試したことが無い」
「やってみよう」
私は真っ青になっていた筈だ。機体が上昇するとマスクを落としそうになり、下降すると吐きそうになった。私もプライムタイムもそれを知っていた。彼は元気なサディストだ。もちろん私は自分の意志で乗っているし、ひとたび地上に降りればギロームの地上軍に遭遇するのだ。そうなったら飛んで逃げる。

さらにこれは始まりでしかなかった。

0930時

今のところ順調に飛んでいる。パーカーは先頭機に従って、下降しエーゲ海の波をかすめて飛行する。こうするとギロームのレーダーを避けて島に近づくことが出来る。

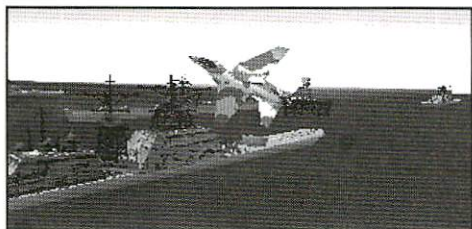
0943時

島から75マイルの地点で敵の第一波に遭遇。プライムタイムは急上昇して、これを回避する。ミサイル発射の警告音がコックピットに響く。私は自分を殺そうとするものを見られなかった。思ったより勇気が無い。少なくとも私はそう思う。

0946時

そいつが来るのが見える。生きた心地がしない。ラジオから叫び声が聞こえる。それどころではない。レーダーガイドだ。プライムタイムは適当な時間をおいてチャフを撒き、アフターバーナーを点火して一気に離脱を図る。私たちの後ろでミサイルが爆発するのが見えた。

1010時

ドッグファイト。長距離ミサイルは多くの個人軍には高くつきすぎる。従って傭兵のドッグファイトは、ガンやサイドワインダー、その他の近距離ミサイルによって行われることになる。私の周りで繰り広げられる戦闘はひどく抽象的に見えた。機の位置、空電の合間をぬって聞こえる妙に澄んだメッセージ、泣き叫ぶ電子の警戒音、ほんの微かな銃声、その一瞬の後には敵のジェット機が煙を引きながら青い海へと落ちて行く。

パラシュートが手当りしだい空に句切りをつける。私の周りのステージでは、誰かの叫び声がそのドラマの最後の演じていた。コクピットの中、もう少しで私は泣くところだった。私の後ろのミサイル発射の音のようなし、席の下から信じられないような攻撃をしている。私は周りの炎と破壊に囲まれてここにいる自分が信じられなくなった。

1030時

島が見えてきた。私たちの下では襲撃チームの上陸用クラフトにパトロールボートが備えている。私たちの編隊は散開しボートに機銃掃射を始めた。島へ向かうクラフトの障害が一掃されている。他の編隊はF-14トムキャットが我々の後ろにつかないように護衛してくれている。同様に島から対空砲火をうけている。仕事をする時間が出来た私は、恐れながらも絶え間なく続くこのハーモニーを楽しんでいた。これらのハーモニーは恐ろしいほどに美しかった。

1040時

襲撃チームが上陸した。一方ではドッグファイトが続いている。私たちの方は南の海岸に添って対空砲火のために身動きが取れない。これは成功した。私たちは地上の敵を攻撃し、襲撃チームについてマンションに突入した。

1100時

滑走路が襲撃チームによって制圧された。フェニックスとギルマンが着陸し始めた。彼らは戦況を評価し、

1125時

ペトロとギロームが書斎でコーヒーとケーキを食べているあいだ、フォレスターは最上階で怒っていた。パーカーは近づくと彼女をなだめようとした。彼女は手を振り解いた。
「よけいなことは言わないで。これを見て！」

彼女は親指を立てて、階下のもう動かないそれを指した。血が壁に染み着いていた。ガラスの向こうには破壊と弾丸の痕が広がっている。
「彼らはここで死んだ。何のために。金持ちの道楽のために」
パーカーは彼女を説得しようとした。
「分け前のためさ。いつもどこでも金のためさ」
「不愉快だわ」
彼女は呟いた。書斎の閉じたドアを見つめながら。
「彼らは何も感じていない。神よ、彼がそれを感じますように」

1200時

ペトロとギロームは愛想よく話し合いながら、私たちの前へ降りてきた。ギロームは様々な宝を指し示した。階下の足元でギロームは照明をあてガラスケースに入れた台座の上の古代の壷を指した。
「およそ紀元前816年の中国製です」
彼の目はプライドに燃えていた。壷の前には『値段がつけられない』と書いたプレートが置かれていた。
「すばらしい」ペトロはつぶやいた。

彼らはドアの方へ向かった。私たちは階下に進んだ。フォレスターが壷の右横にすっと近寄った。その瞬間、彼女の肘打ちがガラスを割り、壷に届いた。
「やめてくれ！」
ギロームは恐怖に満ちて叫んだ。しかし遅かった。フォレスターは血塗れの肘を抜き取った。中では壷とガラスのかけらが混じっていた。
「おう」
彼女はいった。
「貴様、貴様」
ギロームは怒りで顔を真っ赤にしていた。口から言葉が出た。
「この雌豚が！」
「不器用で、済みません」
「この価値を知っているのか？」
「価値が無いといいましたよね」
「値段が無いといったのだ！」
「どっちにしても同じでしょ」

肘をおさえてフェニックスは階下へ降りていった。私たちも後を追った。ギロームの呪いの声が滑走路中に響いた。

1600時

イスタンブールの『巣』に戻る。ギロームは明らかに彼のくずを切り捨てる決心をした。私たちが出るまで何も反抗はなかった。ペトロは契約通りに支払を済ませた。機体も兵士にも損害はない。すばらしいミッションだった。グウェンは相変わらず事故で壊れた壷を修理している。昨夜の行動から全員セリムに帰ってきて次の使命を探している。『売れそして発進せよ』終わりの無いサイクルだ。

基地が静かになった頃、私はスタンボウルの『サドンデス』社に戻った。孤独なマラミュートがサヨナラと吠える。角を曲がると、私のがらくたの中にあの基地も消えていった。

「遠い昔から我々は旅立つ者への思いを込めて別れの言葉を送ってきた。それはここ5年ほどのことだ。ビヨグルではスタンボール地区の薄暗い路地でも、きらびやかだが血塗られた過去をひめたイスティクラルカデシの街路でも、戒めの意味をこめてある言葉が交わされるようになった。『グルー、グルー(Gule gule)』、『しっかりしろ』。これはある独りの戦士を偲んで、人々が彼に与えた敬称でもある。しかし、その彼の名を知る者は既にない。私がイスタンブールに入ったのは、2009年に彼『Gule Gule』の消息が途絶えた後のことだった。この男の英雄的な（なかには残酷という者もいるが）行為に関する伝説は、裏切りを戒めるために大きく誇張され、神話化された話だと私は考えていた。しかし、8月のある日、夜更けにかかってきたサドンデス編集部からの電話。その電話で私はウスクダルの街に向かうように指示された。そしてそれをきっかけに、私の疑問はすべて払拭されることになる。

ボスポラス海峡の対岸、ウスクダルのレジオネア・ホテルにほど近い、荒れ果てた倉庫で我々は出会った。彼は立ち上がり、そのしっかりした体つきに似合わぬ柔らかく静かに響く声で、テーブルをはさんで正面の椅子を私にすすめた。シンプルな黒のブリティッシュ・コマンドー・セーターをはおっている。肩と肘は強靭なパッチで補強されている。黒の作業ズボンに、ノベルベッカー・ブーツ、キッド革の手袋といういでたちだ。その手袋は、リードサップ・グローブ、粉末状の鉛が入った特殊な手袋であることがすぐにわかった。手によくなじみ、一撃のもとに敵を倒す威力がある。落ち着くにつれて、噂に聞いた9mmヘッケラー&コック P7M13ピストルを隠し持っている気配がないことがわかってきた。ブーツに隠しているというグルカククックリナイフも見当たらない。噂によれば、このナイフを抜くのはそれを使うべきときだけだという。だから、それを見たらもう最期だといわれている。『Gule Gule』は臆病なやつが大嫌いだという。しかし、その恐ろしさからいえば、ナイフよりピストルでやられたほうがはるかによい。『しっかり逝く』ためにも、ぜひピストルでお願いしたい。そんな思いを悟られない限りは、ピストルで楽に逝かせてくれるだろう。しかし臆病者は哀れだ。ネパール製の湾曲した刃がその鞘からゆっくりと抜き出されるにつれて近づいてくる長い苦痛の足音に怯えつつ、命乞いをすることになるからだ。

テーブルをはさんで私の正面に腰をおろすと、『Gule Gule』は自己紹介し、さっそく用件を切り出した。彼は、最近のイスタンブール・マーケットで顕著になりつつある、ある傾向を快く思っていないのだという。4年前に彼が姿をくらましてから、経営者の中に以前からの慣習を無視する者が出始めた。特に、彼ら傭兵への支払いを故意に怠る者が目立つようになったのだという。この金の亡者たちは、『Gule Gule』の名と、ある意味で民族的な英雄ともいえるイスタンブールの傭兵に対してはらうべきある種の敬意を忘れているのではあるまいか。そういって『Gule Gule』は語り始めた。

「こうして私は生きている。まずこのことを知ってもらいたかった」哀愁を秘めた微笑みを浮べながらこう語った彼は、

「引退や成功といったことが挫折や失敗とみなされるらしいな、イスタンブールでは」

と言って軽く笑った。しかしすぐに真剣な表情に戻ると

「傭兵をだまして儲けようとする盗人どもに思い出させてやりたいのだ」

と語った。これから話す物語は、8月のある晩に『Gule Gule』が自ら語ってくれたものだ。この状況が変わらなければ自らも行動を起こすだろうと言った彼の言葉を、私は今も信じている。そうなったときは、イスタンブールの歴史に名前を残した数々の暴君と同じように、『Gule Gule』もまた、流れた血にむくいようとしない金の亡者に最悪の悪夢を見せることになるはずだ」

おもしろい話しを聞かせよう。ふたつあるんだが、まずは短いほうから話そうと思う。私はM.シュヴァリエと彼の護衛を尾行し、イスタンブールのビヨグル地区のガラタタワーにいた。あのあたりは日中でも物騒なところだ。日没後はいうまでもない。このエクゼクティブ・タワーのナイトクラブに灯がともり、出入口に立つ私の足元に夜のとばりがおり始めた。客や従業員の探るような視線が一瞬私に向けられる。

「怪物のような男という評判はいただけない。たしかに私は殺し屋だ。しかし、殺すことを何とも思わない冷血漢じゃない」

ここでは私の顔を知らぬ者はない。

ガラタタワーに一歩踏み込むと、連中は伏し目がちに私を避ける。
エレベーターで最上階に昇った私は、丈の長いグレートコートで右手を隠し、にこやかな顔でボーイ長のもとへと向かった。イブニングをまとった脂性の男だ。クラブモザンビークのエントランス、ここが彼の持ち場だ。見るからに薄汚れた私のコートに気付き、貧相な口髭をぴくつかせている。
「おそれいりますが、外套をお預かりいたします」
そう言った彼と私の視線が合った。彼の顔が青ざめていく。
気付かれないように、何やらボタンを押している。ほどなく、M16を持った大柄のトルコ人が、そのしぐさで私に立ち去れと命じてきた。この男は、私がおとなしくひきさがると思ったのだろう。私が愛用のVZ61をコートから抜くと、男に驚愕の色が浮かんだ。しかしそれも、この銃から放たれた無音のつむじ風が彼の表情を永遠に奪うまでの、ほんの一瞬のことだった。

「4年前の私の失踪は、傭兵達を銃弾の標的になる奴等くらいにしか思っていない経営者の間に古い体質を復活させる契機になってしまったようだ」

いうまでもないだろうが、このトルコ人は用心棒である。だから、死も職業上避けがたい危険のひとつにすぎない。しかし、ボーイ長はシビリアンだ。気絶させるにしても慎重にやる。しかし、そんな心づかいが仇になることもある。その気になれば、床に崩れ落ちる前に大声で叫ぶこともできるからだ。
このスコーピオン（Skopion）にはサイレンサーがついている。ここで奴を殺しても、それと気付かれる心配はほとんどない。行動に移ろうとしたまさにそのとき、ウェイターのひとりがあげた女のような甲高い悲鳴に、中にいたM.シュヴァリエの護衛がひとり、素早く反応して、こちらを見た。
その護衛の手がジャケットの内側を目指すのを見て、私は床に突っ伏した。最初の弾は、左のこめかみのすぐ脇の床にそれた。私はスコーピオンの軽量ワイヤーでできた台じりを肩にあてがう。その護衛の素早い動きには、さすがの私も驚いた。思ったより優秀な奴だ。最期の一発になるまで撃たせたうえで、額のど真ん中に狙いをつけた。彼の一発は高くそれ、後ろのゴムの木の鉢を撃ち砕いた。
それが彼の最期だった。
動きが鈍かった他の連中は、けばけばしいキャバレーの照明の中、その額に赤い花を咲かせることになった。私はM.シュヴァリエを哀れに思う。
頼りになる味方をもつことは、なんと難しいことか。ほどなく残りの護衛も片付いた。その中には、白いディナー・スーツの懐に手を差し入れたまま倒れているほど動作の鈍い者もいた。いまさら言っても始まらないが、この男達もまたなんと酷な稼業を選んだものか。

「ひとつの教訓として、これから話す私の過去を聞いてほしい。これは警告でもある」

トルコ人からM16を奪いとると、私はM.シュヴァリエのテーブルに向かった。彼は私に背を向けていた。肩越しに振り返った彼は、大きく目を見開き、合わせた唇の間には食べかけのスパゲッティーをぶらさげている。
「M.シュヴァリエさんですね？」
ズルズルっとスパゲッティが吸い込まれた。
「なにをいう、人違いだろう」
私は笑った。彼も笑う。口の中でソースが踊った。

「M.シュヴァリエさん、ここでは迷惑がかかる。いっしょに出ていただけませんか」
「よかろう」
そう言うと彼は、手を揺すりながら立ち上がった。ひきつった笑いを浮かべている。
我々はレストランを出た。ガラタタワーの出口のドアはM.シュヴァリエが開けてくれる。裏通りに入り、数発撃ってくずどもを追い払う。そしてM.シュヴァリエのためにタバコに火をつけた。彼の眉がぴくっと上がる。意外だったようだ。しかし、彼はこのタバコを受け取った。
「キャメルか、私の好きなやつだ」
「調査は完璧にやる主義でね」
彼はうなづいた。
「さすがGule Guleだな」
それから少し間をおいて
「どうだ、3倍払おうじゃないか」
と言う。
ショックだった。
「M.シュヴァリエ、あなたとは違う。私は金を積まれたからといって約束を違えるような男ではない。わかってないようだな」
「もちろん、そうだろうとも」
そう言った彼は落胆した様子で最期のキャメルをもみ消した。
「ただ、試してみただけさ」
どこかで、誰かの悲鳴が聞こえた。彼は生唾をのむ。これが彼が初めて見せた恐怖の証だった。
「往生際の悪い男じゃないと思ったが。」
「そのとおりだ」
そう応えて彼は微笑んだ。
「酸いも甘いも知りつくした男だよ、私は」
私は笑みで応えた。
「もう一本いかがです？」
彼がタバコをとろうとしたその瞬間、私は脳天を撃ち抜いた。
思いやりのある殺しには、ほとんど手間がかからないものだ。

「私自身についてあまり詳しく話すつもりはない。正体不明でいたほうがよいと思う確かな理由があるからだ」

この話をしたのには、いくつか理由がある。まず、怪物のような男という評判はいただけない。たしかに私は殺し屋だ。しかし、殺すことを何とも思わない冷血漢じゃない。M.シュヴァリエはTemplerのTigersとの約束を果たさなかった。男達を支援する飛行大隊を送らず無駄な血を流させただけでなく、本来なら彼らが受け取るべき報酬をだまし取った。M.シュヴァリエはそれによって負うことになるリスクを知らない男ではない。彼にとって運が悪かったのは、この件の処理を私が請け負ったことだろう。しかし、そうなる可能性は常にあったはずだ。臆病で、仕事の遂行と私の安全を脅かすかもしれない奴だったが、私流のやり方を貫いてあのヒステリックなボーイ長を巻き添えにせずに済んだことは幸いだった。私はけっして怪物ではない。ただ変わり者で、ばか正直なだけなのだ。

「ともかく、私は、数々の経験を積んだ連中の誰よりも、殺し屋として訓練された男だった。しかしスタンボールではその実力を示す機会に恵まれなかった」

もうひとつの理由、それはM.シュヴァリエの勇気を賛えるためだ。彼は最期の瞬間まで、威厳を失うまいとする男だった。勇気ある男にはフェアに対峙する。それが私のやり方だ。私のターゲットがすべてそうだったらよいのだが。さて、そろそろ次のもっと大事な話しに移ろう。
しかし君はまず、なぜ私が隠遁生活からこんな話しをするために戻ってきたのか、その理由を知りたいだろう。4年前の私の失踪は、傭兵達を安価で補充がきく、銃弾の標的になるべく生きている連中であり、対等に付き合うに値しないと考える経営者を復活させる契機になってしまったようだ。流れる血の対価を支払おうとしない、この金の亡者達に、ひとつの教訓として、私の話を聞いてほしかったのだ。これは私からの警告でもある。
あれは2004年の、11月末のことだ。それは傭兵にとって頭の痛い日々の始まりだった。トルコは外交軍特権(Diplomatic Forces Immunity)の適用範囲の拡大を数ケ月後に控えていた。今度は同国内で活動する全ての傭兵も対象になる。その時は、この私も、こ

の新しいイスタンブールの示した条件に群がる顔のない野心家、わずかな仕事を求めてうごめく群衆のひとりだった。
数少ない雇い主を得るのは困難をきわめた。傭兵の市場はまだ未熟で、独自に刺客をかかえようとする企業も、政府公認の血の報復にまだ疑問を抱いていたからだ。
それでも、プロの刺客を闇の職業とする者にとって、この条件は充分魅力的なものだった。歴戦の強者もいた。彼らは数多くの戦争であらゆる状況と自然の猛威を前にして戦い、野獣のように、まどろみさえ浮かべながら生き抜いてきた、目を伏せて避けて通りたくなるような連中だ。それと対照的なのが、たとえばこの私のような連中だった。若く、経験の割には自信過剰気味の、裏通りを根城としてきた連中だ。

「だから私はバーに入り浸り、案内にしたがって、機会をうかがっていた。実力を示す機会の到来をただひたすら待ち続けた。…それは、Clawsの破滅とともに訪れた」

私自身についてあまり詳しく話すつもりはない。正体がわからない男でいたほうがよいと思う確かな理由があるからだ。これだけは言っておこう。傭兵や職業軍人としての経験は少ないが、私は隠密行動と奇襲攻撃の訓練を受けている。そんな機密扱いの知識をもつ者が、いかにして所属部隊をぬけることができたのか、それについてはまた別の機会に話そう。ともかく、私は、ここでは誰よりも殺し屋として訓練された男だった。しかしスタンボールでは、その実力を示す機会に恵まれなかった。だから私はバーに入り浸り、案内にしたがって、機会をうかがっていた。ただひたすらに待ち続けた。
そしてその機会は、Clawsの破滅とともに訪れた。
2004年にイスタンブールに住んでいた者なら、まず間違いなく、クレアボーン アエロスペース社の大虐殺にまつわる話しを覚えているはずだ。航空兵器の分野で競合するサンプラス アエロスペース社は、Clawsを雇い、クレアボーン社を全面的に襲撃しようともくろんだ。報酬が高く困難なその仕事に、Clawsがとびついたことはいうまでもない。Clawsの部隊の優秀さをみこんでの契約だったという。
なぜ彼らが選ばれたのか、その真の理由はよくわからない。
しかしサンプラス社はクレアボーン アエロスペース社の防衛力をきわめて甘くみるという、きわめて問題のある情報を与えて、Clawsをクレアボーン社に忍び込ませた。そこでClawsは予期しなかった強硬な抵抗にあう。
サンプラス社の狙いはじつはそこにあったのだ。
彼らはその特殊なニーズに応えるに足ると思われる部隊を選んだのだ。クレアボーン社に重大な被害を与えるには充分だが、反撃に耐えて生還するほどの戦闘力はない部隊であること、それが彼らの条件だった。
こうして、サンプラス社は、ライバルを制すると同時に、報酬の支払いからも免れようとしたわけだ。霧散した部隊に報酬を受取りにくる能力はないと、サンプラス社の経営陣は考えたのだろう。何らかの戦力が残ったとしても、サンプラス社防衛隊のF-15の敵ではない。
ここまではサンプラス社の経営陣の予想も正しかった。Clawsはクレアボーン社のハリアー飛行連隊の急襲にあったが、彼の部隊は善戦し、クレアボーン社の施設に重大な被害を与えていた。そして、サンプラス社の経営陣が望んだとおり、Clawsの部隊はその戦力の95%以上を失って壊滅した。
サンプラス社が約束を果たさなかったとき、生き残ったClawsは誰かに頼るほかないことに気がついた。充分な戦力がない以上、力づくでの集金は不可能だ。法の力に訴える資金力も持ちあわせていなかった。要するに、泣き寝入りせざるを得ない状況に追い込まれていたわけだ。自分達が受け取るはずだった報酬を謝礼にあてる。そうするしか手がなかったのだ。
彼らはブラック・マーケットの執行官であり、最近は『契約紛争コンサルタント』とも呼ばれる、暗殺者、刺客の力を頼ることになった。いずれにしても報酬を手にできる見込みがないことを悟ったClawsは、最終的にサンプラス社の代表取締役に報復することを望んだわけだ。

「彼らはその特殊なニーズに応えるに足ると思われる部隊を選んだのだ。クレアボーン社に重大な被害を与えるには充分だが、反撃に耐えて生還するほどの戦闘力はない部隊であること、それが彼らの条件だった」

ところがそれからしばらくたっても、この方法による満足は得られなかった。一流の刺客を振り向かせるだけの資金がなかったからだ。リスクのわりにその報酬が少なすぎた。イスタンブールの一流の刺客に全員断わられ、半ばやけくそになった彼は、確かな経験も実績もなかった当時の私のような人間にも目を向けるようになった。安くても引き受けてくれると思ったからだ。

ここで私が登場する。

私のもとを訪ねるまでに、この男はひどくやせこけたようだ。もちろん、昔の彼を知るよしもない。しかし、この男がだぶだぶの衣服をまとっていたことだけは確かだ。ゆううつそうな顔に、判断を誤ったこと、指揮官として生き残ったことによる苦悩がうかがえる。目の下のくぼみは、彼が手渡そうとしているもの、それが彼の全財産であることを物語っていた。悪霊にとりつかれたような彼の表情に、私は彼を信じようと思ったのだ。彼の言葉が真実であったことを私が知ったのは、それから4ケ月して彼が自殺した後のことだった。

「サンプラス社はライバルを制すると同時に、報酬の支払いからも免れようとしたのだ」

必要な衣類を買う、あるいは食料や住みかを確保するなど、人生をやり直すために財産を使うかわりに、この男はすべての金と労力をつぎ込み、最後の破壊の宴の準備をしていた私はそれを何度かみたが、身の毛もよだつ光景であった。しかし、私は背を向けなかった。

この仕事は危険だ。しかし、もし成功すれば、名を上げることができるだろう。そう考えたのだ。しかも、私はまだ若く、むこうみずな男だった。だからこそ、あの男の最期の金を受取り、手足となって復讐を果たすことに同意したのだ。(その金をいかに使うべきかは話し合わなかった。私は投資ブローカーではないからだ。私は血塗られた報酬のために働く。依頼主の血が染みこんだ金はその目的のために使うのだ。)

やるべき仕事がある。私はやらねばならないのだ。私は恐怖と向き合う覚悟を決めた。サンプラス アエロスペース社は、その組織にたったひとりで立ち向かおうと決めた男の試練の場となった。私の目標は代表取締役CEOのMr. ディラード マクドナルド、彼をみせしめにすることだ。しかし、厳重な警備網をいかに破るか。這い上がろうとする若者にとって、それは厄介な問題だった。プロとして初めての仕事は引き受けた。しかし、いかにして成し遂げればよいのだろうか。

「サンプラス社の裏切りに気づいたとき、生き残ったClawsは誰かに頼るほかないことを悟った」

ある日の午後、偶然に、ビヨグルの福祉病院から通りを横切ることを思いついた。そこはClawsの部隊の数少ない生き残りが生命の危機と無言の闘いを続けている病院だ。サンプラスの裏切りの犠牲者をこの目で直に確認すべく、私は中に入ってみることにした。

この病院には、ふたりの兵が収容されている。ひとりは機械の助けがなければ呼吸ができない。肺には問題がない。しかし、彼は脳に損傷があるのだ。自律神経系にも重大な障害がある。奇妙に変形し包帯とワイヤーに包まれたその男が、パイロットであり、家族のあるひとりの人間だったとはにわかには信じがたい。

そこにいるのは彼が愛した妻と幼い息子だろう。そこには、この男が帰ってくると強く信じていなければありえない、そんな家族の姿があった。この男の治療費が家族の重荷になっていないのは、トルコの傭兵保険が高額で頼りになるからだ(おそらく、彼らにはこの生命維持装置の費用はまかなえないはずだ)。
いくら費用がかかっても、この男がほとんど植物状態で昏睡から醒める見込みがないとしても、この国

の政府は正確に1年間彼を生かしておくはずだ。薄暗い廊下に立って、静かにその様子を見ていると、この先起こることがさらにはっきりと見えてくる。また、この男の未亡人がいかにがんばっても、イスタンブールのような街で女手ひとつで幼い子供を育て上げることがどれほど難しいか。この家族も、いずれ病院を訪れる頻度が減り、この男のことを静かに、それも過去形で語るようになるのだろう。

「報酬を手にする見込みがないことを悟ったClawsは、最期にサンプラス社の代表取締役に報復することを望んだ」

それはよくあることだ。それでも、悲しいことには違いない。私は歩き始めた。
もうひとりの隊員については、多くを語りたくない。彼はやけど治療の病棟にいた。彼は全身の65%にやけどを負った。この男の目に浮かぶ恐怖の色と、病棟のあちこちから、絶え間なくあがるうめき声、そして嫌な臭い。その様子は思いだしたくない。
その日の午後、病院の階段を足早に降りる私は、すでに覚悟を決めていた。最終的に、たとえプロの殺し屋であっても、殺しは全て自分自身のためにやるものなのだ。私はすすんでその重荷をひきうけることにした。そして、それからは自分を粗末にしなくなった。

「これは最期の警告だ、マクドナルド。おまえに裏切られた部隊の生き残りの者への利息も加えて、約束のものを支払うことだ。さもなくば、おまえを殺す」

情報を集め、分析し評価する。あらゆる行動はそこから始まる。この情報ももとに、いつ行動をおこすべきか決めるのだ。しかしながら、情報の有無に関わらず、作戦行動にはおのずといくつかの前提条件があるものだ。たとえば、ワンサンプラススクェアの一斉攻撃は問題外の行動だ。AK-47と手榴弾による襲撃は、自らを粗末にする愚か者のやることだ。運よく代表取締役を殺すことができたとしても、そこから生還することはできないだろう。

襲撃のターゲットである代表取締役を、なんとかひとりで職場の外へおびき出せないか。そのためには、彼の日常生活や習慣、毎日の予定とよく行く場所を調べあげる必要がある。

しかし、ここで問題が生じた。一般的な手段ではCEO ディラード マクドナルドに関する情報が全く得られなかったからだ。電話帳にも、住所録にも載っていない。

ワンサンプラススクェアのロビーに掲げられた、コーポレート・モンスターというよりは1950年代の連続コメディーの役者のような写真とネームプレートを除けば、出生証明書と病院に残るわずかなカルテが彼の存在を裏付ける唯一の資料だった。最悪の手段ではあるが、ほかに情報を得る手段がない以上、尾行して習慣を探るしかない。彼はビルの出入りに地下に設けられたドライブウェイを利用する。しかし、この地下道は、各所でイスタンブールの公道に接続されているのだ。

やるべきことはひとつしかない。オフィスの盗聴だ。ビルに忍び込むのはまず不可能。わずかに望みはある。しかし方法は限られている。

私はとりあえず楽観的に考えることにした。私には隠密行動に従事し、ある種のハイテク機器を扱った経験がある。それがあれば、そして正しく使うならば、可能性はある。あらゆるものには長所があれば欠点もあるものだ。小型盗聴機とさらに高度なある種の機材の組み合わせるのだ。ベストな機材を決めるには、まず、サンプラス社の警戒体勢を調べなければならない。信じられないかもしれないが、それは最も簡単な仕事なのだ。

私は警備会社の採用を検討中の会社員を装って、イスタンブールの警備会社に電話をかけまくった。警備会社はどこも、新しい顧客を欲しがっているものだ。だから、代表的な顧客を自慢げに教えてくれる。こうしてついに、サンプラス社を担当する警備会社を見つけだすことに成功した。このように、最も重要で秘密にされるべき情報も、思わぬところから容易に漏れてしまうものだ。サンプラス社が委託している警備会社はここに間違いない、私はそう確信した。

ところが悪い知らせだ。サンプラス社では1日に2回、ビル全体にわたる盗聴機探査を徹底的に行っているという。彼のオフィスに仕掛ける盗聴機は、長期にわたってこの厳しい探索の網にかからないような物でなければならない。一般的な盗聴機材ではとてもだめだ。

いや、電話ならどうだろうか。

サンプラス アエロスペース社に電話すると、ディラード マクドナルドに取り次ぐよう頼んでみた。うまくいくとは思わなかったが、やはりだめだった。マクドナルドの秘書の秘書の段階で、お決まりの『メッセージをどうぞ』にやられてしまう。私にはどうにもならない。誰かの助けが必要だ。
その翌日、私は、ワンサンプラススクェアに張り込み、ビルに出入りする人々を観察していた。彼らに近づくために、私はイスタンブールの乞食に変装していた。また見破られないためにサンプラスにはあまり近づかなかった。この様子は、まるでコンスタンチノープルの慈善事業の様であった。

これといった策もないまま粘っていると、思わぬ人物があらわれた。有名な財界人、ジェサップ マーテルがワンサンプラススクェアに入っていく。彼はCEOに会いに行くのだ、そう私は確信した。

「情報を集め、分析し評価する。あらゆる行動はそこから始まる。この情報ももとに、いつ行動をおこすべきか決めるのだ」

これで道は拓けた。

翌朝、準備を整えた私は、サンプラス アエロスペース社に電話した。
「ディラードさんをたのむ」
「失礼ですが、お名前を」
「ジェサップ マーテルと伝えてくれたまえ」
「少々お待ちください」
今度は、彼の秘書、そしてその秘書の秘書の壁を越えることができた。電話がつながり、彼の甲高い声が聞こえてきた。
「ジェサップくん、なにかいい話しかね」
私はスイッチを入れる。これで準備は整った。そしてこう切り出した。
「復讐だよ、マクドナルド。いい言葉だろう。」
一瞬の沈黙。そして私はこう続けた。
「おまえにはサンプラス アエロスペース社を代表して精算すべき大きな借りがあるはずだ。まさかClawsの名を忘れたとは言わさんぞ。」
マクドナルドは笑った。
「何のジョークだ？おまえは誰だ？」
「これは最期の警告だ、マクドナルド。おまえに裏切られた部隊の生き残りの者への利息も加えて、約束のものを支払うことだ。さもなくば、おまえを殺す」
「わかった。」
そう言ってマクドナルドが誰かに何か指示する声が聞こえた。
「ところでおまえは誰だ？死に神か？それともこれは悪い夢か？」
そう言ってマクドナルドは笑った。これには私もつられて笑った。
「そんな大げさなものじゃない、うけあってもいい。おまえが裏切った者に雇われた刺客といっておこう。死に神でもなければ、悪夢でもない。ナイフの使い手で、生皮をそがれる人間の醜さを知っている男とだけ言っておこう。これは、あんたのためを思って言っているのだ、マクドナルド。よく考えてみることだ」
マクドナルドの怒った声を初めて聞いた。
「貴様、私を脅す気か！調子にのるな！うまくやったつもりだろうが、自分のことを心配しろ。Clawsの連中なんて我々の手にかかればひとひねりだ。連中には、私を殺す苦労を考えれば到底つり合わない金額しか支払う能力がないことを、私が知らないとでも思っているのか。いいかよく聞け。この私に生皮をはがれたくなかったら、その金をもってどこかへ消えろ」

「この野郎のことを知れば知るほど、復讐の念が込み上げてきた」

「それが答えか？」
「そうだ」
こうして彼は物理的に不可能な行動へと私を駆り立てたのだ。

「よくわかった。そういうことならしかたがない。覚悟して待つんだな、マクドナルド」
彼は電話を切った。しかし、ライン・スライサーの赤いランプはまだついたままだ。彼の電話は切れている。電話することもできるし、長距離通話を申し込むこともできる。しかし、私のほうが切らない限り、こちらからはまだつながった状態なのだ。念のために確かめてみたが、大丈夫だった。マクドナルドの声がよく聞こえる。
「この私を脅迫するなんて、まったく身の程知らずだ」
「いったいどこにいるんだ」
受話器をアンプクレードルに置いた私は、レコーダーをセットし、ボリュームをひねった。このライン・スライサーは、こちら側で電話を切るか、電子回路を誤動作させるようなサージ（雑音）が入るかしない限り、電話線の一部として働き続ける。それゆえに、厳重な検査プログラムに対しても、オフィスに設置する盗聴機より安全なのだ。
こうして私は彼の神聖な場所に侵入した。

「やるべき仕事がある。私はやらねばならない」

この野郎のことを知れば知るほど、復讐の念が込み上げてきた。
それからわずか数日で、マクドナルドのワンサンプラススクェアからの脱出ルートを知ることができた。これで彼を尾行し、イスタンブール市内での行動を把握することができる。ボディガードと財産に囲まれて、ホーン迄のみすぼらしい町から登ったホーンを見下ろす上がったを見下ろす超高級な特別室から、ボスポラス海峡にかかる橋の眺めが印象的なハイライズ・ホテルのギャンブリング・パーラーまで、ビヨグルの街のあちこちで彼は豪勢な食事を楽しんだ。離れていても私をあざける頽廃に、私は驚いた。彼が通っているような高級クラブには入ったこともないが、彼の食事を間近でみたことがある。その晩の彼は、一般人も入ることができる高級レストランで食事することを選んだからだ。こころづけの威力で、彼の隣のテーブルを確保したのだ。

食欲と闘いながら慎重に最も安いメニューを選ぼうとしている私の傍らで、マクドナルドは、タラーマ、ボアクラ、アーティーチョーク、羊の脳みそなど15皿からなる前菜、メゼをつまんでいた。
そして、それらの高価な珍味を少しずつ味わっては捨てている。ストイックに欲望を抑さえ彼を囲んでいるボディガードの運命がだぶってみえる。マクドナルドはメインコース、imam bayildi（『イスラムの導師も卒倒する』ほど素晴らしい料理という意味でそう言うらしい）に移った。スグリと松の実を添えた七面鳥、ブルブルユバシ、ヘルバ、ラバットロクムと食通にはたまらない逸品が並ぶ。
私は自分の小さな皿すら食べきれなかった。マクドナルドのテーブルから漂う芳しい肉の匂いが、やけど治療の病棟のことを思いださせたからだ。きちんとのり付けされた彼の襟は、このブタ野郎が1ケ月に浪費するよりもまだ少ない金を得るために、自分の人生と家族の幸せを賭けて危険に挑んだ男の、一度は人間だったことのある肉塊にまかれたあの包帯を思い起こさせた。

「私はごみの山を越えてさらに車を走らせながら、イスタンブールの物価は安いのだ、簡単に手に入るさ、と自分に言い聞かせた」

その夜は、胸のむかつきに気力も萎えてしまった。もうなにもしたくない。今夜の尾行はとりやめだ。この数週間ですでに、行動計画の立案に充分な情報を集め終えていたし、町中の公衆浴場で小さな楽しみを見つけることに一生懸命だった。
マクドナルドの一行がレストランを出ていくのを見送って、夜の街に車を走らせた。ビヨグルの貧しい木造の家は、古き良き時代の映画のセットのようにかしいでして、壁は打ち伸ばしたブリキの破片のつぎはぎで作られているか、ごみで塞がれているだけだった。ストーブの煙突が通りのごみのはきだめまで水平に突き出し、すすを貧しい通行人の顔にふりまいていた。悲惨な建物は道の方に倒れかけ、マクドナルドが通るとまるで質問を覆い被せているように見えた。

答えても無駄であろう。

私はごみの山を越えてさらに車を走らせながら、イスタンブールの物価は安いのだ、簡単に手に入るさ、

と自分に言い聞かせた。
ついにそのときがきた。
マクドナルドを1週間尾行して、彼は用心深く、何かにこだわる傾向のある男であることがわかった。警備上の理由があるとはいえ、1日の行動パターンを毎日微妙に変えているほどだ。ただし、ただひとつの例外－女のもとを訪ねること－を除いて。彼には妻子がある。だから、この女とロマンチックな時を過ごす機会はそう多くはない。週に一度この女と会うとき、彼は最も信頼できるボディガードをひとりつれて、スタンボールのswankest街のアパートに向かう。このしゃれたアパートに女を住まわせているのだ。曜日と時間は変わっても、この場所とボディーガードいつも同じなのだ。

「マクドナルドがぐっと近づいてくる。ねじくれた、野蛮な顔だ。そしてこう言った。君にはそれなりのおとしまえをつけてもらおう」

これで決まった。あとはマクドナルドの電話を待ってその空白、つまり曜日と時間を埋めればよい。それが彼の最期になるはずだ。
その日がついにきた。遅いミーティングの席で、止むを得ない、朝までかかるだろう。それじゃ、いってくるよ。そう妻に言って、マクドナルドは出発した。
これが最初で最期のチャンスになるだろう。必ず成し遂げなければならぬ。
そして、ステファニーにも電話が入った。思ったとおりだ。これで決まった。決行は今夜10時。そして毛羽立った深紅の室内靴を履いた
マクドナルドは節操の無い背教者であった。
私も身支度を整える。左腕の下に9mmヘックラー&コック。6個の予備弾倉。スプリングアクション・ホルスター。これは初心者には扱い難い。しかし、私は大丈夫だ。リードサップ・グローブ。長いコートの大きくしたポケットにスコーピオンVZ61。そして予備の弾倉。左のブーツにクックリ・ナイフ。予想外の事態への心構え。準備は整った。
6時。ステファニーの住むスタンボール地区へ向かうべくタクシーを呼ぶ。ふたりが会うのは10時の予定だ。
しかし、ひどい渋滞で1マイル1時間かかることもある。必ず時間までに行かねばならない。この件はこれでけりをつけたかったから、成功の機会はひとつたりとも逃さないように慎重になっていた。
8時。イギリス領事館にほど近い優雅な6階建てのホテル、ペラパラスの外に私はいた。
スコーピオンを握り締め、通りを横切る。
マクドナルドが出てきて、こちら向いた。ポケットからスコーピオンを抜き出す私のほうを向いたのだ。背中にマシンガンの銃口を感じたのは、まさにその瞬間のことだった。
「動くな」何者かにそう命じられた。
私のスコーピオンは後ろの男に奪われた。マクドナルドは私に笑いかけ、ついてくるように合図した。肩越しにうかがうと、私の後ろには6人の武装した男が立っていた。

「Clawsは負け犬だった。しかし、何者か知らんがおまえのような男を雇うとはな」
そう言った彼は悲しそうな表情を浮かべ、肩をすくめてみせた。
「まぁ、ともかく、」
まるで父親のように私の頬を平手で打ち、そしてこう言った。
「Gule、gule、我が友よ」

「行け」その中のひとりに命じられる。私は従った。マクドナルドと我々6人が乗って、エレベーターは窮屈だ。マクドナルドは6階を押した。ステファニーの住むフロアだ。ドアが閉まる。彼がこちらを向いた。
「さて、私の生皮をはぐといったのは君だったな。そうだろう？どうなんだ？」
彼は手の甲で私を殴った。口に血の味がひろがった。
「おまえはばかだ。私がライン・スライサーに気付かないとでも思ったかね？私を甘くみたようだな」
マクドナルドはこう言って笑った。
「私には最高の人材を雇う余裕があるのだ。わかるだろう、君にも」
私の後ろで類人猿が、まさにそのとおりだといわんばかりに、くすくすと笑う。マクドナルドがぐっと近づいてくる。ねじくれた、野蛮な顔だ。
「君にはそれなりのおとしまえをつけてもらう」

ベルが鳴った。6階に着き、我々は降りた。
ステファニーのアパートは、よい趣味の部屋だった。薄暗い照明で売春婦が魅力的に見えるのと同じようなもので、すぐ近くで見ないかぎりは、という条件がつくが。

ちょっとみると優雅にみえる装飾も、じつはひどくけばけばしい。こまごまとした装身具や宝石の類が、乱雑に、あるいは無造作に散らばっている。しかし彼女、ステファニーはよい娘のようだ。美しく、無邪気そうだ。20才そこそこだろう。彼女は自分の後援者のまだ知らなかった一面に当惑の色を隠せないようだ。私に気がついた彼女は、不安げなまなざしをマクドナルドに向けた。
「ちょっと出ていてくれ」
彼がそう言うのが聞こえた。
「すぐに終わる」
ふたりの男が私の腕を取り、残った連中は私に銃口を向けている。マクドナルドが戻ってきた。彼は、ガラスの向こうにいる忌まわしい昆虫、自然の中で出会ったら刺されて命を落とすことになるかもしれない昆虫を見るような目で、私をじろじろと見た。そして、何かに悩むかのように首を振った。
「Clawsは負け犬だった。しかし、何者か知らんがおまえのような男を雇うとはな」
そう言って、彼は悲しそうな表情を浮かべ、肩をすくめてみせた。
「まぁ、ともかく、」
そこまで言って彼は、まるで父親がそうするかのように、私の頬を平手打ちにした。
「Gule、gule、我が友よ」

「どこへ連れていく気だ？」
マクドナルドがたずねる。
「君のオフィスだ。よもや忘れてはいまい？」
リムジンにゆられながら、私は彼の家族のことを考えていた。

そう言って彼は、男達に合図し、部屋を出るとドアを閉めた。
私はこのときを待っていたのだ。
左手首の内側でトリガーを叩くと、左ポケットに忍ばせてあった圧力容器から吹き出した《Cyonel》が部屋に充満した。

言葉を発する間も無く、まわりの男達は硬直し、床に倒れた。神経毒に冒された口や目、耳、そして鼻の穴から大量の血が流れ出る。私はあらかじめ解毒剤を服用していた。それが幸いした。私がうけたこの神経毒による影響といえば、この惨状をみて吐き気を感じたことくらいだ。

ガスが霧散するまで、約10秒待ってから、私はドアを開けた。こんな死にかたは、CEO ディラード マクドナルドにはあっけなさすぎる。これまでの彼にとっては、丁重なもてなしを受けるのが当然のことだったはずだ。最期に彼を失望させるわけにはいかない。

私はドアを開けた。そこには誰もいなかった。マクドナルドのために衣服を脱いだステファニーを見つけるまで、無言でベッドルームを移動した。彼女は悲鳴をあげ、シーツの端をつかんで身を隠した。
「失礼、お嬢さん」
そう言った私は、礼儀正しく目をそむけた。
「あなたの愛しい人と私には、まだやるべきことがあるのです。そうだな、ディラード？」
ステファニーの足元に倒れこんだマクドナルドは、大きく見開いた瞳で彼女のくすんだピンク色の上履きを、無言でみつめていた。ポカンと開いた彼の口が閉じるのを待って、私はこう続けた。
「さあ、お嬢さん、衣類を着けなさい。あなたを縛ったら、我々は立ち去るから」
彼女は衣服をまとった。私は彼女をしっかりと縛りあげ、マクドナルドに自分のリムジンを呼ばせた後、電話を壊した。マクドナルドと私は、階段を降り、何事もなくリムジンに乗り込んだ。
「どこへ連れていく気だ？」
マクドナルドがたずねる。
「君のオフィスだ。よもや忘れてはいまい？」
リムジンにゆられながら、私は彼の家族のことを考えていた。

「どうした、おまえは殺し屋だろう。俺が雇ってやる。値段を言ってみろ。まるくおさめようじゃないか」
「残念だが、そう簡単にはいかないのだ」
と私は応えた。
「どういうことだ、金の他に何が不足だ」
「名誉だ」

我々は、マクドナルド専用の地下エレベーターで、人気のないオフィス・ビルに入った。こうすれば、ひとつを除いて、すべてのセキュリティ・チェックポイントを迂回できるのだ（そのひとつは、何か不都合があったとき備えて合言葉を使って警報を発することができるという。マクドナルドには、一言でも余計なことを言ったらその頭を撃ち抜くと、あらかじめ言ってある）。

我々はエレベーターを降りて、彼専用の高級なオフィスに入った。私は彼を突き飛ばし、カーペットにころがす。
「いくら欲しいんだ。好きなだけやる」
彼はそう言った。
私はこのしゃれたオフィスを見渡した。一杯飲むためのバーや磨き上げられたメノウ石のキャビネットに収められたステレオ・セット、壁を1面使ったフラット・スクリーンなどが目にはいる。そんな中で特に目についたのが、この部屋の一画を占めたビデオ関連の機材だ。うまく使えば、私の評判を確かなものにするのに役立つだろう。そう思った私は、ビデオ機材のセッティングにとりかかった。マクドナルドは自分の机に、じりじりと近寄ろうとしている。私は彼をカーペットの中央にひきずり戻した。彼は生唾を飲み込んだ。
「どうした、おまえは殺し屋だろう。俺が雇ってやる。値段を言ってみろ。まるくおさめようじゃないか」
「残念だが、そう簡単にはいかないのだ」と私は応えた。
「どういうことだ、金の他に何が不足だ」
「名誉だ」
「ふん」
と彼は毒づいた。
「絵空言を言うな。さあ言ってくれ、いくらだせばいいんだ」
準備ができた。録画を始める。
私が9mmを抜くと、マクドナルドは青ざめた。
「待て、何でも好きなものが手に入るんだぞ……」
まず気にいらないのは忍び寄ってくる奴の声だ。聞いていると、いらいらしてくる。
「みっともないぞ。こういうことになると言ったはずだ。そうだろう？」
そう言って私は笑った。
「Gule、gule、あれは独り言じゃないのか」
私は、彼に近づいた。青白く不健康そうな奴の頬に涙が光った。これは意外だった。
「あぁっ、神様！、やめろ、やめてくれ！」
彼はボールのようにうずくまった。まったく、なんてことだ。たくさんの男を死に追いやってきたこの男が、床に倒れ、泣きじゃくりながら、自分がやってきたことを弁解している。私はこのような臆病者が一番嫌いなのだ。
こんな男に情けは無用だ。
私はホルスターに銃を収め、かわりにグルカ・ナイフを抜いた。
彼が哀れな叫び声をあげるたびに、『Gule、gule』と私はつぶやく。

"哀れな男の叫び声に、『Gule、gule』と私は応えた。"

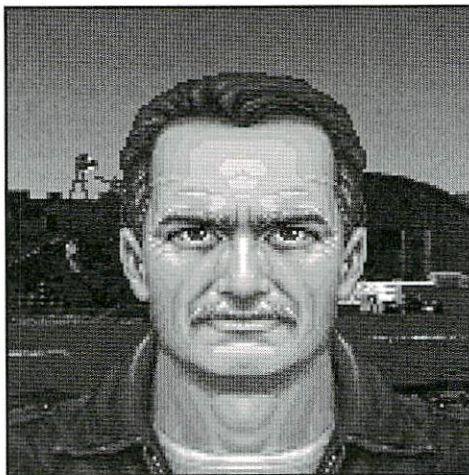
機械に入れたビデオテープはそのままにしておいた。これを見よ、と注意書きもつけてある。翌朝は早く目が覚めた。忘れてきたものはないはずだ。ライン・スプライサーにはいる物音を聞きながら、朝食をとる。それは9時頃のことだった。マクドナルドのオフィスのドアが開く音に続いて、女の悲鳴と、ドサッという鈍い音が聞こえてきた。ざわめきと、あわてふためいた叫び声、警察への連絡、注意書きを書いた紙のサラサラいう音、VCRのスイッチを入れる音が聞こえてきた。そして悲鳴と、嘔吐する音で締めくくられた。
私にできることといえば、この電話を切ることくらいだ。
その翌日になると、この話題は地方紙はもちろんのこと、全国紙にも取り上げられた。最初から意図し

てやったわけではないが、あの一本のビデオテープによって、私は、『Gule、gule』とつぶやきながら言葉にできない行為を成した謎の刺客として祭り上げられることになった。『Gule、gule』というあのフレーズを、私のことを指す言葉として使った記者がいた。時間とともに、それは私の代名詞になった。私の経験では『勇者には銃、そして臆病者にはナイフ』というやりかたが最も効果的だった。
引退した今も、必要なときには戻ってくる『Gule、Gule』として私は生きている。私は警告する。血を流して任務を果たす傭兵を手玉にとろうと考える経営者は注意せよ。その代償は想像以上に高くつくだろう。

ジェームズ・スターンの知られざる物語

調査レポート

ジェームズ『ホーク』スターンは、トルコ周辺の伝説である。市場にはワイルドキャッツ以上に成功した部隊もあるが、必ずしも本分に反してまで過激な行動にはでない。毎年この男の良心のとがめ（緊張と呼ぶ人もいる）を含む分別の意識がワイルドキャッツを破綻に導いているが、毎年スターンはこの伝統の習慣が誤りであることを証明してみせる。結局、今でもこの問題は残っている。いったい何がジェームズ・スターンを動かしているのだろうか。スターン自身以外には誰もはっきりとはわからないだろう。しかし、おそらく何かが公の記録からこの偉大な男を選ぶことができるだろう。

ジェームズ・スターンはインディアナのミュンシー出身で上中階級の出身だった。アメリカの中部にいるとき、つまり少年時代、彼は愛国主義者だった。すばらしい成績と課外でのすばらしいリーダーシップ、地方軍人達の推薦によってスターンはアナポリス海軍学校に入学した。そこでスターンは初めてジャン・ポール・プリデュークスと出会った。その男こそが後の人生で友情と親しみの源となる男だった。プリデュークスはリーダーシップと知性を兼ね備えていた。彼らはすぐに友達となりライバルとなった。4年後にその関係が終わりになるまで、彼らの関係はお互いの力を高めたのだった。スターンは学校で1位、プリデュークスは2位だった。二人は異なる任務をうけた。スターンは海軍のパイロットとして空母エンタープライズに乗り、プリデュークスはハワイの基地に配属された。彼らはその後、長い間合うことがなかったがその友情は続いた。スターンはテキサスセクションの間、ペルシャ湾やメキシコ湾などの異なった戦区でその優秀性を認められ、大佐の地位に推挙され、戦隊を引き連れて原子力空母USSシローに乗り込んだ。シローの失敗を含む奇妙な状況は未だ機密扱いだが、いくつかの事実はそれにも関わらず知られている。

スターンは最高司令官の命をうけ2001年の石油戦争の間、アラスカ軍やその同盟国と戦った。独立国家連邦やOPEC、3つのブロックはその時、そこに軍をおいていた。海からのアラスカに対する襲撃はあらかじめ運命づけられていた

のだ。この不運のとがめに対する疑問にはまだ結論がでないはずだ。ペンタゴンはこの地方のことをどう考えていたのだろうか。スターンはこれに気がついていたのだろうか。いずれにしても、彼がシローに乗り込むことは危険を承知のことだった。決定的な石油戦争の軍の作戦が判明する前に、スターンの指令が失敗したのは不運だった。

この状況はスターンの上司や歴史に大きく拡大するとして論じられてきた。ペンタゴンはシローを決して終わった戦争にしようとはしなかった。そしてそこには、勝利のシナリオがあったに違いないとか、スターンの失敗が国を敗北に導いたのだとか論じられた。スターン自身は国の政策について論じることはなかった。同様にペンタゴンはこの事件に関するトップシークレットを守っているため、この疑問は両者が話をするまで解決されないだろう。

しかし、私たちはスターンやライル・リチャードがシローの生き残りだと知っている。スターンが唯一の生き残りだと信じられているがこれはきっと真実ではないだろう。そして私たちはスターンが海軍をやめてシローの失敗に源を発するワイルドキャッツの創立を想像することができる。経験から彼が死ととなりあわせの利益をえらんだとしても、傭兵という者は彼らの理由と利益のために生命の危険を犯すものだろうか。同様に残忍な命令を実行するのだろうか。このような状況のなか必然的にワイルドキャッツは問題の中から生まれてきたような気がする。

スターンがどのような理由であれワイルドキャッツを作れば、古くからの友人であり、ライバルであるジャン・ポール・プリデュークスが現れるのは時間の問題であった。スターンとは違いプレジャークスは落ちつきが無さすぎて軍の空母には安住できなかった。義務的な4年の任務を終えて彼は海軍をやめた。最後にイスタンブールで自由契約の仕事がくるまで飛行機の仕事や傭兵の仕事をとるために飛行場を何年か放浪した。そんなときスターンに再会し、ワイルドキャッツに入ったのだ。

古い友人は再び一緒になった。最初の数年間は不安定だった。新しいイスタンブールの傭兵市場は自分の足で仕事を探さなくてはならなかった。客は少なく、仕事も少なかった。プリデュークスはスターンがその僅かな仕事すらも拒絶することに対して、日に日にいらだちを覚えていった。近くの仕事ならなおさらであった。そしてある日突然、プリデュークスはワイルドキャッツをやめていった。ジャッカルとして知られている莫大な利益をあげる傭兵部隊を作るためだった。

この裏切りはスターンにとって厳しい時期の厳しい向かい風となった。そしてジャッカルの増え続ける利益はワイルドキャッツを困惑させ、スターンに不安を与えた。それにも関わらず、この2人は連絡を取り合っているとされている。

ワイルドキャッツの将来に関して1つだけはっきりしていることがある。スターンはこの不道徳な世界でその道徳を守り続けるだろう。そして少なくともそれは一つの達成なのだ。

LEADER OF THE PACK

パックのリーダー ジャッカルが語る

ジャン・ポール・プリデュークスの独占インタビュー

ワイルドキャッツを離れてから4年の間に、ジャッカルはトルコで最も成功した部隊となった。それはもはや伝説となっている。はじめて『サドンデス』がワイルドキャッツの特集を組むに当たり、プリデュークスは沈黙を破り、私たちの独占インタビューに答えてくれた。ワイルドキャッツ特集についても快い同意を得た。

「私は私のワイルドキャッツの話をしたいんだ」と彼は電話越しに言った。

「疑いもなくワイルドキャッツの多くは私や私のチームを悪く言うだろう。私は私のスタンスで話が出来る機会が欲しい」

私はプリデュークスがいつも使っているセリムの後ろのテーブルで彼にあった。以下はその記録である。

SD: 私はこのテーブルがとても排他的だと思うのですが、これは正しい位置なのですか。

JP: そうです、セリムのマネージャーが毎晩、私のためにリザーブしておいてくれるのです。

SD: あなたの雇主がここにきて、あなたに仕事を与えるのですね。

JP: その通りです。それが私たちがここ4年間で大きな成功をした要因なのです。多くの傭兵のように、かつては私も飲み屋のテーブルを移ったものでした。仕事を探してくれる将来のクライアントにせがむのです。今では仕事の方が私たちの所へやってきます。

SD: 過去の事ですが、ワイルドキャッツをやめたときの事を教えて下さい。

JP: ジェームズ・スターンと私はアナポリスで一緒でした。しかし、そのとき彼は彼の現実的問題に気づきませんでした。彼は戦争の哲学と技術に関係する人でした。

SD: しかし、彼は総代で卒業し、あなたは主席で卒業したのですね。

JP: （沈黙）そうです。私は彼のリーダーとしての能力を否定したことはありません。私は彼の傭兵としての生き方に問題があると思うのです。特に金の稼ぎ方です。

SD: あなたはスターンの「道徳的」傾向についていっていますね。もちろんあなたはジャッカルのリーダーですから彼のやり方やどんな使命でも、気に入らないのではないですか。

JP: 仕事は仕事です。私はこのビジネスの哲学的側面を問題にしているのではないのです。そこに含まれる問題を見ているのです。スターンと私の唯一の違いは結論だけです。

SD: あなたはどんな使命でも、どんな汚い仕事でもそれを正当化できるということですか。

JP: 絶対です。ご承知のように、普通のモラルは単純にビジネスには当てはまりません。悪は個人的な問題を考えるときには十分有効ですが、ビジネスを実行するときには、単純に無意味な概念にもなるのです。死という要因が絡むビジネスは必ず倫理的な疑問が上がります。しかし、倫理的疑問は哲学者や馬鹿にはわかるがビジネスマンにはわからないのです。悪は自由意志の行為の一つなのです。ビジネスには市場の助けが必要不可欠です。私が依頼を受けたなら、それは正邪ではなく損益の問題なのです。

SD: 話を戻しまして、何がどの様に起こったのかを教えて下さい。

JP: もちろん、突然の事ではなく、スターンは初めからその手の仕事は受けないといっていました。例えば市民を巻添えにした市街戦や機構に背いての急襲などです。彼は私がワイルドキャッツ

に入るとき3つの話をしましたが私はそのとき、彼の傭兵としてのこのライフスタイルが彼を突然駄目にしたのだと思いました。

SD: その印象とは

JP: もし工場のコンビナートがあり、労働者が死ぬ危険がなければ、あなたは爆弾を落としますか。その町に対する作戦はどうしますか。あなたは通りのタンクだけを狙うかも知れないが失敗したらどうしますか。ビルを壊したらどうでしょう。あなたはジレンマに襲われるでしょう。

SD: スターンはこの問題をどう解決したのですか。

JP: 私が思うには合理化です。彼は市民に死傷者の出る仕事は断わります。そして底の方にたまっている他の仕事の長所を評価するのです。本当に悲しいです。

SD: あなたは彼が無意味な殺し合いや無実の人を殺すことを避けるためにできるだけのことをしたといいましたね。

JP: はい。

SD: しかし、厳密な哲学的意味では私たちは皆何をするのでしょう。どうやって最善の方法を選ぶのでしょうか。

JP: 私がいいたいのは傭兵の作戦においては、人は死にさらされる。彼らが標的になろうと死のうと議論の余地があるということです。

SD: それではあなたは市民が死ぬことを何とも思わないのですか。

JP: 馬鹿なことを言わないでください。私はどんな時でも市民の負傷者を守ります。しかし、無実の血が流される可能性のある厳しい約束には皆目を背けるのでしょう。それではどの部隊も仕事から帰ってこられないでしょう。

SD: しかし、ワイルドキャッツは生き残っています。

JP: 危険な状況の時、神は幼い子や愚かなものを守ってくださる。他の誰もが歴史となる。いずれにしても、私たちは議論し、私はワイルドキャッツをやめた。パイロットの何人もがお金を稼ぐということに対してもっと真剣にならなければいけない時期だと感じていた。そして彼らは私の所へ来た。私は多くの首都を守るために汚い仕事をし、ジャッカルを作った。それから私たちは仲間にアピールすることで残酷な名声を得た。彼らは嘘をついたり制服を来たふりをする傭兵には用がなかった。彼らは『我々は何人の人を殺すのですか』と問う傭兵はいらないのです。『何人の人間を殺して欲しいですか』と問う傭兵が欲しいのです。

SD: これを聞かせて下さい。あなたがワイルドキャッツをやめてから4年間、他のイスタンブールの部隊と同様にワイルドキャッツも根本的な危機にあるとき、ジャッカルは成功を続けた。あなたはこれをあなた自身の哲学の弁護だと思いませんか。またワイルドキャッツの将来はどうなると思いますか。

JP: 成功に弁護はいらない。ワイルドキャッツは金に逆らい、私はそれにしたがった。あなた方はその種の勇気をもっとたたえるべきだ。たとえ大変なときでも、例えばドン・キゾッテのように無駄な努力になったとしても、ジェームズ・スターンと私はときどき会ってチェスをする。

SD: 私はあなたの話に少し嘘があると思う。

JP: もちろん、古い敵よりもよい友はいない。

SD: わかりました。一つだけ疑問が残るのはワイルドキャッツの将来です。あなたの予想を聞かせて下さい。

JP: 彼らは疑いなく運命付けられている。彼らは破産からもう一歩の所で生き残っている。将来の成功へのよい基盤が無い。彼らは来年までにこの世界から姿を消すだろう。そして私はワイルドキャッツの皆さんとスターンを仲間に向かえるのだ。私は彼らを向かえることを約束する。彼らはよいパイロットだからだ。

SD: あなたは彼らをジャッカルに入れるのですか。

JP: 彼らを私の基準に慣らせるのです。自然に。

SD: プリデュークス大佐、このようなインタビューに答えてくださり、感謝します。

JP: どういたしまして。

歴史探訪：混乱の20年

DECADE OF TURMOIL WINDS TO A CLOSE

2000年から2010年の10年間は一般的メディアで『混乱の10年』と名付けれられたにもかかわらず、歴史学者や社会学者達は同様に直ちにそのラベルについて論争を始めた。これらの記録者達は2000年にあわせたかのような大混乱を、単に80年代にセットされた動き、政治経済的なアメリカの破局、中東紛争、世界的な石油依存、ソビエト連邦の崩壊、その結果としての世界的な国家主義の台頭が最高潮に達しただけだと指摘した。

あきらかに80・90年代の出来事の多くはこの間に起こった世界的力学構造の変化に起因する。この点では学者達は正しい。しかし素人の観点からは、過去の十年間は劇的な前例の無い流動の見地からは独立しているように思える。

公的な定義と論争にも係わらず、われわれ『サドンデス』は過去十年間を『商業的十年間』とくくりたい。商業市場の前例の無い成長を考えて、サドンデスは過去20年間の特筆事件のサマリーを提示する。編集スタッフは、私たちが経験する次の十年間の新世界の秩序構造に寄与すると感じる発展をリストアップした。

1992 ソビエト連邦の終焉と独立州共和国(CIS)の成立に促されて、東ヨーロッパの少数派は交戦国家感情の逆回転による新発見の自由に遭遇した。中央政府のペレストロイカの保証と民主的・資本主義的理念の公的理解にも係わらず、へんぴな衛星州の大部分はCISからの離脱を企てた。これはCISのいたるところで軍事的なこぜりあいを引き起こした。いくつかの断続的な紛争によるストレスは、強力な中央政府の力と国際的な不満の増大による政府の強硬派の再起を促した。

1994 イラクは公式に核攻撃力の保有を表明した。イラクへの非難とこの国に対する軍事力行使を承認する国連の声明が発表された。アメリカは『砂漠の嵐』作戦以来サウジアラビアでの最初の職業軍を展開した。イラクの核目標に対する『手術的』攻撃から成る作戦副産物に着手した。これらの奇襲は計画よりも幾らか手術的効果が劣った。全部で20あまりのアメリカの『スマート』ミサイルは市民を攻撃し、広い範囲に被害を及ぼした。結果的な反米感情の逆転は西側勢力に対する中東ジハードとの連合を招いた。石油輸出は中断され、中東の西洋人は打ちのめされた。アメリカはイラン・イラクに対して報復攻撃をした。一方石油の欠乏からアメリカ政府は製油企業を増設しアラスカで採掘した。事故が起こり結果的に無視できない環境への被害が発生した。アラスカは抗議に満ちアメリカを告訴した。告訴は連邦法廷により却下された。

1995 CIS衛星州で育成されたヨーロッパ国家主義は西側諸国に広がった。イギリスではウェールズとスコットランドが独立論をなし、テロが横行した。ガイフォークスデイの開催中、テロの爆撃により英国下院ビルが爆破されたとき、西側中に衝撃が走った。

1997 東側の経済、軍事力を抑止する西側勢力として、中東に平和が復活した。しかし価格面では、東側の主要な油田が破壊されたことにより世界的な石油危機がおとずれた。アラスカの抗議の声にもかかわらず、アラスカの採掘は増加した。その上、アメリカの政策は沖の採掘へとエスカレートし、核エネルギーの推進は戦闘的な環境グループによって提示された環境抗議協定により抑えられた。エコ・テロリズムの発生率は1996年の記録にてらして700%と推定される。

1998

テロリズムの増大によって警告され、既に安定を失った世界的力学構造をさらに分割しようとする国家主義を予防するために、アメリカ、イギリス、ドイツはCIS内の反乱を鎮めるための中央政府を補佐する目的でCISの軍を認めた。

2000

CISの代わりの西軍は挫折し撤退した。そしてCISを孤立させ混沌に陥れた。第2次アメリカ経済崩壊は2000年4月16日に始まった。そのとき国際社会は石油に依存し、低いドル対円レートによって悪化し『決算日』になだれこんだ。1930年代の大恐慌以来の最悪の株式市場が出現した。過去においてしばしば政府による救済を受けてきた日本人ブローカーは学習できなかった。西側の三大金融機関－FISCOMP、第一次同盟銀行とトラスト、米国商品取引－がドアを閉ざし、速やかに国内の銀行とS&Lに波及した。連邦政府は殆ど破産し、FDIC債でそれを埋めようとした。

一方、『巨大な一撃』がとうとうカリフォルニアをおそった。それはオークランドとサンマテオ、サンフランシスコのリッチモンド橋を破壊した。ロサンゼルスのほとんどのハイウェイと自由構造を活動不能にした。カリフォルニアの産業は事実上機能を停止し、数十万の人々が死亡か行方不明となった。その時連邦政府は金融危機を理由に災害援助を拒絶した。サンフランシスコとカリフォルニアで暴動が発生した。カリフォルニアは連邦からの脱退をほのめかして脅した。アメリカ政府は連邦軍を差し向けた。しかし地方の抵抗は強固であることが判明した。連邦政府はカリフォルニアの崩壊に対し十分な力を準備していたにもかかわらず、過度の力は、一般の意見を考えるとカリフォルニアの価値ある自然資源に対する愚かな権利だと思われていた。

2001

この問題を解決するための連邦政府の調査に基づき、議会はFDICの瓦解を補償するための新税を課した。この点、国会議員はカリフォルニア問題を解決する工夫をしたと信じていた。税という形式のカリフォルニア救援提案は次の百年以上を予定している。これはカリフォルニアを満足させた。

しかし、それは国家の休息にはならなかった。

テキサスは最初に連邦から脱退しただけではなく税上の内乱から3つの州に分裂した。ついでアラスカが独立を宣言し、アラスカのパイプラインを封鎖、彼らの石油を国家資源として宣言した。議会は国際な石油・経済状況を考えると、今や死活問題となった石油を入手するため、軍事力によってこのアラスカとの問題を解決することを決定した。しかしその間にカナダはアラスカと相互不可侵条約を結んでいた。カナダはアラスカの主権を認め、アラスカが攻撃された際の援助を約束した。

この紛争は拡大し『2001年石油戦争』として知られるアメリカ、カナダ、アラスカ、OPECとアラスカの石油の権利のために核を使わない戦争にだけ参加するCISの残りによる国際紛争にまで成長した。結果的にアラスカの大部分は油田への引火と同時に燃え上がった。そしてアメリカとカナダの海軍に重大な損失が課せられることになった。

2002

アラスカの破壊の報復に、環境保護論者達はヨセミテ国立公園の軍居住地を加入させた。この行為は、環境活動家とセッティングサン（海外投資会社であり公園内の旅行者の関心が鍵となる）の東側オーナーの間に直ちに紛争を引き起こした。これはアメリカの土地で合法的に傭兵が雇用された最初である。スキャンダルが議会を揺るがした。両党の議長が殺し屋への謝礼金スキャンダルに巻き込まれた。外人の意志による手で、アメリカの土地に、アメリカ人の血を流すのを認めさせるために国会議員が連絡を取ったという証拠が明らかになったとき、職権乱用の申し立てが出来る。

5月2日23:43実施。IRSは20万人の雇用者を得て、全国的な還付金の収集のための激しい軍事行動を始めた。『魔女検査』と呼ばれ、直ちに市民デモに広がった。下町の分け前、ワシントンは『ジュンティーンス・パージ』の間に消された。IRSは市民に恐怖政治を行うとして告訴された。アメリカ大陸中央のもっとも大きな都会に吹き出した騒動が怒りを明確にした。

2001年石油戦争の損失の後、CISはその神通力を失

い、アメリカを攻撃したのと同じ軍によってバラバラにされ、内政と自由領域は崩壊した。政府は日本の投資をせがみ、資源のない日本は、ロシアにレートの高い円を投資する不利な交渉のほうびとして、その機会を歓迎した。そして失敗により打ち切られた。現在では日本はロシアの28%を支配し、残りをCISが支配している。

2003 テキサスのリードにしたがって、この年以来50州のうち14の州が独立を宣言した。テネシー、ミシシッピー、アラバマ、ジョージアは合併し、南連邦ブロックを形成した。南北ダコタと南北カロライナはそれぞれ合併し、IRSの侵略の防御として一つの州になった。それとは反対に州に無頓着な不平もある。連邦政府は州の独立の権利を認めない。そして独立党派から税を取り続ける企てを進めている。12月発行のタイム誌は議論好きな編集者によって市民戦争は避けられないといっている。一方、アメリカ政府は、進行中の軍事関連を維持するために、社会的、行政的プログラムから資金問題に関する目を外らせるために批評を描いた。アメリカの事実的破産と、企業に対する追加税の徴収のためのIRSによる企ての指示により、多くのメジャー企業が参加の元で最初の多国籍企業サミットをストックホルムで開いた。この協議により、企業は彼らの主権とテロ行為に従事する独立民族国家（アメリカとIRS）に対する不可解を表明した。この独立は国際共同体により試みられ、直ちに企業は彼ら自身の私設防衛軍を手配した。この防衛戦術を導入した結果として、2005年までに全面的企業間戦争は日常的なものとなった。

2005 国際緊急国家宣言の特権として、ゲレロ大統領はIRSを拡大し、企業や不法脱退国からの未収税の徴収組織としての権利を認めた。市街戦で自動武器を手にIRS会計監査官を追い払ったニューヨーク市民に対し、IRS司令は徴税の手助けにオランダ傭兵部隊を雇った。新しい戦闘環境により育てられた市場の需要を満たすために傭兵達は姿を現した。トルコが『トルコ政府軍』としての権利と、利益の10%と引き換えに傭兵航空隊の特権を認めたときから、イスタンブールは『傭兵市場』として知られるようになった。これまでの彼らの法的に疑問の残る行動に対する保証を利用して、1ダースを越える、大規模な傭兵航空部隊がトルコ国境内に姿を現した。
国際法の抜け穴と彼らに有利な新世界秩序の混沌を利用して、傭兵航空隊は、トルコ政府の密使と考えられるトルコ基地から作戦を展開していた。そして外交免除の原則による『技術創造志願』により国境周辺で比較的無難に行動できた。この免除はトルコ領土内の傭兵航空隊の作戦実行に対し、直接関係のある政府を防ぐものである。トルコで怒った政府が彼らの契約を解消したとき、外国の怒りをかった航空隊はときどき標的にされた。このような行動にもかかわらずトルコ政府は仕事上有利と考え、出来るときにはいつも長く続く抗争を外交上奨励した。同様に危険よりむしろ彼ら自身の防衛空軍をとった外国政府と企業は危険な攻撃命令に耐えうる傭兵を雇い始めていた。この編成は利益の事だけを考えているように見える。現状の永続を奨励し、ある意味で不可能な機能上の自由を傭兵に許す。自由な国際法解釈により許された緯度の無視。傭兵取引はトルコ最大の輸出産業となった。
一方、ニカラグア、ホンジュラス、エル・サルバドルと中央アメリカブロックであると宣言した国々は2前戦争でガテマラ、コスタリカを攻撃した。
南アメリカの不安なつぼみ、アメリカの経済崩壊は南アメリカ内でのU.S.ローンの失敗を認めた。この予期しない財政援助は安定を欠く、多くの南アメリカ諸国は戦争の贅沢を発見し、侵略投機を実行し始めた。

2008 イタリアの経済が崩壊し、バチカン市国が領土を拡大し、新教皇国を宣言した。世界勢力としての日本の優秀性は西洋人の興味を東洋の宗教に向かわせた。多くの神聖ローマ教会信徒がカソリックに改宗した。法王は警告し始め、ゴールデン&シュワルツの広告会社を、彼の神聖なる無限の救済のための戦いの為に雇った。それは信仰の危機よりPRプログラムということを表していた。ゴールデン&シュワルツの指導の元、悪魔払いが一般的にテレビ放映されるようになった。産児制限が認められた。そして

カソリック教会はナショナルエンクワイア誌上の広告で、他の商業的に成功した団体と同列に位置し始めた。
資本主義とテロリズムの権化アメリカは領土内で資産を破壊した傭兵航空隊の利益に課税し始めた。

2011-20 編集者の予想

石油の供給は減少し続けるだろう。自動車は一部の超エリートを除いては過去の物となるだろう。そしてガソリンは、第1に船舶、トラック、発電、防衛目的に使われるだろう。傭兵航空隊は残りの燃料の大部分を消費するだろう。そしてこの10年の終わりまで彼らの給与の25％は作戦実行のためのオイルの調達に当てられる。オイルダラーは世界勢力としてのOPECが依然として存在し続けるだろう。そしてミデアスタン石油が供給されれば世界第1位の日本の勢力に挑戦できる連合を作れるであろう。
日本はその大きさと資源の比率を大幅に越え頂点に上り詰めた。結局この世界のどこでも仕事上の決断をするには日本人の言い訳を聞かなければならない。トルコのテロリズムは暴力と死で町を廃虚にしてしまうプロの殺人者の調達と保有によって窒息するだろう。

今、ちっぽけな私たちは長く困難な旅の終わりに達した。ストライクコマンダーは、チームのみんなが「そう、それは地獄の2年間だったがその終わりで我々は特別な何かを想像できたことを誇りに思う」といえるゲームである。
このように才能ある集団のこのように献身的な態度はみたことが無い。ストライクコマンダーとはそういうゲームである。

目の下の隈、不精髭、深夜のピザ、無視された妻や恋人について考えるとき、何が我々をこうさせるのか考えたものだ。理由の1つはストライクコマンダーを開発したチームの20名が全員熱烈なゲームプレイヤーであるということかも知れない。自分のフィールドの開発状況に係わらず、ゲームを買って遊んでいる。日中にゲームをやりすぎて本業が夜中になることもしばしばである。我々のゲームもそのように扱ってもらいたいものだ。陳腐に聞こえるかも知れないが我々にとってそれが仕事以上の喜びである。我々がコンピュータストアに入ると誰かが近づいてきて「ストライクコマンダーはいままでやったゲームの中で最高です」といってくれるのを夢みている。

あなたの同意が得られますように

クリス・ロバート

□ 品質には万全を期しておりますが、万一製造上の原因による不良がありました場合には新しい製品とお取り替えいたします。
□ 本ソフト使用により生じたいかなる事態にも、当社は一切責任を負いかねますのでご了承下さい。
□ ゲーム内容（ヒント、攻略方法など）につきましてのご質問にはお答えしておりませんのでご了承下さい。
□ ご使用のハードウェア、周辺機器の設定につきましては各ハードウェアメーカー、販売店にお問い合わせ下さい。弊社ではお答えできません。
□ DOSのコマンドにつきましては、弊社ではお答えできません。
□ この商品についてのご質問は当社カスタマーサポート係までご連絡下さい。

03-5410-3100　　月～金　13:00～16:00

発行　エレクトロニック・アーツ・ビクター株式会社
〒150　東京都渋谷区神宮前2－4－12　フルークス外苑